

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The kite, Toggle-headed Harpoons of the Ainu : Typology and Chronology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 和義 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004626

アイヌのキテ（回転式離頭鉞）の諸系列

——形態分類と編年——

大 塚 和 義*

The *kite*, Toggle-headed Harpoons of the Ainu:

Typology and Chronology

Kazuyoshi OHTSUKA

Prior to the 20th century the Ainu caught large fish and sea animals by means of toggle-headed harpoons known as *kite*. The 120 examples referred to in this paper represent the majority of *kite* known to be extant. The author has classified these into types according to their distribution, shape and function.

Type A—found only along the coast of Iburi. Its rear barbs are large and wing-shaped, with flat ends. Used mainly for catching swordfish.

Type B—found in most Ainu regions, this type can further be classed into five subtypes (B₁–B₅). Its rear barbs are pointed. Used for catching sunfish, dolphin, and probably all kinds of sea animals (seals, fur seal, sea lions, whales, etc.).

Type C—found on the Japan Sea side of Oshima peninsula and along the straits of Tsugaru. Similar in shape to Type B, it is rhombic in cross-section with a longitudinal ridge line. Targets of use unknown.

Type D—found only on the coast of the Gulf of Uchiura. The back cavity is shallow and the top of the rear barb is V-shaped. The tip is bent slightly so that aconite poison can be placed in the neck groove. Used for catching whales.

Type E—found along the Gulf of Uchiura. It has a hole perforated at right angles to the face of the harpoon.

In addition to these 120 from modern times, numerous other Ainu harpoons have been retrieved from archaeological sites. These can be given the following chronological arrangement:

* 国立民族学博物館第1研究部

Types A and B₂ may be considered to be the most recent since they have not been found in prehistoric ruins. I assume that they came into existence around the beginning of the 19th century. Type C can be traced to the end of the 18th century, and Type D presumably derives from the same period.

Harpoons of Type B (except B₂) were found inside the body of a whale caught offshore from Kōchi in 1725. So it can be argued that they date at the latest to the early 18th century. Furthermore, harpoons of a type similar to Type B occur in archaeological sites in Hokkaido, where they date to around the 17th century. I have tentatively classed these Hokkaido specimens as Type F.

Type F appears to have been developed as a cross between two types of harpoons. One was the so-called *Ketsunyu-ritō-mori*, a harpoon known as early as 7000 years ago in Hokkaido. The other was a type of harpoon that came in from the north around the time of the 12th century. With Type F we have the first form of the Ainu *kite*.

はじめに	(3) Type B ₃
I. キテの構造と機能	(4) Type B ₄
II. 資料検討	3. Type C
III. 型式設定とその分布	4. Type D
1. Type A	5. Type E
2. Type B	6. 計測値よりみたキテの諸型式
(1) Type B ₁	IV. 諸系列の編年的位置づけ
(2) Type B ₂	V. まとめ

はじめに

沿岸地方に居住するアイヌは、およそ19世紀後半頃まで、キテ *kite* とよぶ特徴ある鉞を用いて、海獣や大形魚類をさかんに捕獲していた。このキテは、獲物の体内に射こまれるといくらか移転して停止し、体内にとどまって再び離脱しにくい構造をもつ鉞の総称で、地域や捕獲対象のちがいによって、形態にかなりの相違がみられるものである。つまり鉞の形態は、それぞれの地域において、素材の選び方、製作手法、使用の方法、これに〈好み〉や〈くせ〉も加味されて、技術的伝統を強くもちながらも、回遊してくる獲物のちがい、すなわち、外皮の硬軟、皮下脂肪の厚さ、肉質、習

性などに応じて構造・形態に多くのバリエーションが生みだされている。

キテ漁は、小さな丸木舟を操って、根気よく獲物をまち、ひとたび獲物を捕捉すると体力の限界ぎりぎりまでの壮絶な闘いをくりひろげなければならない危険ななりわいであったが、また、狩漁者の心をかきたてる魅力的なしごとでもあった。このようなキテ漁を直接体験した生存者は、もはやおらず、現在、断片的な伝聞を記憶している者がわずかに知られるのみである。

しかしながら、キテの実物資料自体は、各地の博物館等に150点ほど現存しているものと推定される。わけても、現存する最大で最良のコレクションである北海道大学農学部附属博物館所蔵の90点前後をかぞえるキテの大部分は、名取武光によって1937年に精力的に各地から収集されたものであり、しかも、収集地や用途などがかなりの程度明らかな、資料価値の高いものが含まれている。筆者は、この北大資料をはじめ、現存するキテの集成につとめた結果、約120点ほどを実見できた。

キテに関する研究は、1939年に名取武光によって、はじめて体系的に形態、地域差が論じられた。しかし、名取の試みた6つの地域的形態区分は、現時点においていくつかの点で不備があり、修正されなければならないものとする。本論で筆者は、キテをあらたな形態分類にもとづいて、8つの型式に設定したい。また、これら8つの型式が、単なる地域差という言葉でかたづけられてしまう内容のものではなく、それぞれが地域的集団の伝統を強くひくものであり、しかも捕獲対象のちがいを顕著に反映するものであること。さらに発掘出土例によって、これらの型式が北太平洋沿岸諸地域における先史時代からの銚の型式変遷のあり方とふかく関わっていることを指摘したい。つまり、アイヌがどのような過程をたどって海獣や大形魚類の捕獲技術を習得したものであるかを、とくに象徴的なキテをとおして究明してゆきたい。

I. キテの構造と機能

キテの資料検討に入るまえに、キテの全体的メカニズムと運動のプロセスについて、概略を述べておきたい。

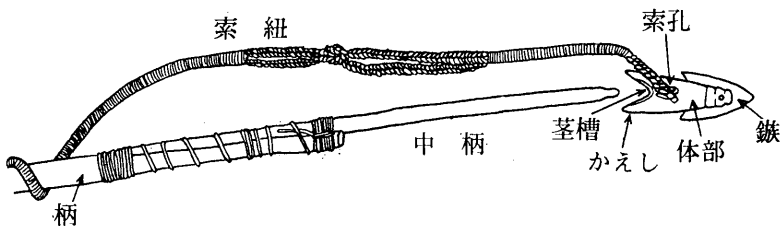


図1 キテの構造と部分名称

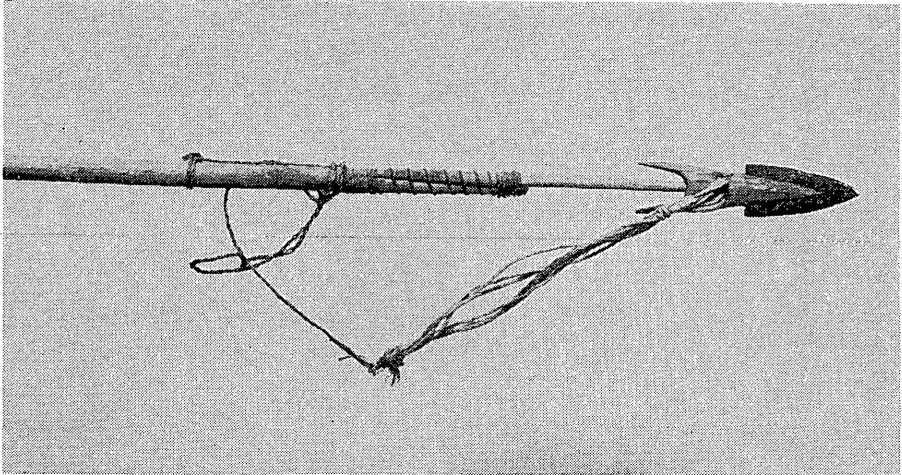


図2 キテの模型（北海道大学農学部付属博物館所蔵）

図1に示したものは、キテ鉞が柄からわずかに離脱したところである。各部分名称を和名で示したのは、アイヌ語彙による採録が不十分で、きわめて統一性を欠き、記述が繁雑をきわめるためである。

キテ *kite* という単語は、狭義には鉞先（鉞頭）そのものを指すようであるが、柄に装着した状態のキテ漁具のしかけ全体を呼ぶ際にもつかわれている。ほかに、付属物を含めた全体を槍（柄）を意味するオプ *op* とも呼んでいるが、槍は別にあるので適切な用法でない。鉞先は、鏃（先金・穂尖など）と体部（胴体）より成る。鏃は、顎の意であるノット *not* (*nochihi*) と呼ぶ。これは、鏃の両端の形状が人間の顎（かえし、逆刺、鉤など）に似ているからで、形に重きをおいた語である。体部は、ツマム *tumam*（体、胴、幹などの意）という。ポネへ *ponehe*（骨の意）とも採録されているが、この体部が多く骨角でつくられていることによって [佐藤, 1938: p. 68]。また、かえし部（尾、翼など）は、尾の意のチニヒ *chinihi*、あるいはチキル *chikiri*（その足の意） [久保寺, 1977] と呼ばれる。かえしの内側の付根に穿たれた茎槽¹⁾は、中柄の先端を挿入するための孔で、貫通はしていない。茎槽は、キテシュエ *kite-shuye* と採録されている。鉞と柄を結びつけるなかだちの中柄（付柄）はラシュパ *rashupa*、ラスパ *rasupa* と呼ばれ、木ぎれを意味するラス *rasu* からきている。中柄と柄を結びつける紐はオプセシケカ *op-seshke-ka*（柄をとじる紐の意）である。さらに

1) 茎槽という用語は、長谷部言人の論文 [長谷部, 1926a: pp. 141-145] [長谷部, 1926b: pp. 303-306] による。筆者は、これに茎溝という用語を対置したい。茎槽は閉窩式・有窩式、茎溝は開溝式・有溝式にはほぼ一致する。筆者は、かつて茎溝を茎槽と誤って用いたことがある。ここに訂正したい [大塚, 1966: p. 33]。

獲物をたぐりよせる紐、つまり索紐(索綱)はニンガ *ninka*、またはニンパ *nimpa* と呼ばれ、「ひっぱってずらす、引きずる」の意である。また、索紐を銛に通す一對の孔、すなわち索孔をニンガプイ *ninka-pui* (*pui* は孔の意)と呼んでいる。この索紐と索孔のアイヌ語呼称は、その働きをきわめて適切にあらわしている。索紐は、イラクサの繊維を撚って紐につくり、ハイツシ *hai-tush* (イラクサの紐の意)と呼ぶ。柄尻には、指を掛ける小さなT字形の木製品がつけてあるが、これをオペケン *op-kesh* (柄尻の意)という。このほか部分名称がいくつかあるが、本稿の記述と直接関係がないので除く²⁾。

材質について若干述べると、鏃は、表1でみるようにすべて金属であり、鉄、銅、真鍮で、多くは古金を再生して使っている。銛の体部は、鹿角やメカジキの口吻部や海獣骨など骨か角が主体で、木製のものも若干ある。中柄は、長さ45cm前後で、胆振地方ではサビタ *rashupa-ni* [佐藤, 1938: p. 68] や斜里方面ではヤナギヤカバの類でもつくられる [藤村・平川, 1975: pp. 39-40]。しかし、筆者の実際みたところでは、鹿角製のものもかなり多い。柄は2.5~4mほどで、樫の木でつくる。

つぎに、銛のいわゆる“回転運動”について述べておきたい。図3に描いたものは、筆者が机上で想定したものである。いままで“回転”について、やはり机上想定による図式化や記述が試みられてきたが、かなり誤りがあり、具体性に乏しいので、あえて筆者の考えを図に描いたしだいである。いずれは科学的な実験で解明されなければならないことはいうまでもない。

はじめに図3-Aのごとく、銛の尖端の金属製鏃が、獲物の外皮を突き破って体内に射込まれるわけである。この場合、突入時に外皮にできた切れ目の形状は、ほぼ直線で鏃の最大幅の長さをもつものであると考えられる。体部や尾部の厚みなどは、鏃によって切り開かれた切れ目を押しひろげるだけで、あまり抵抗なく銛は体内に挿入されるであろう。尾部の最大幅の長さより、鏃のそれが若干短かくとも、ある程度外皮には弾力性があるから、それほど問題にはならないとみたい。銛の突入深度は、銛自体が完全に外皮を貫いて体内の脂肪層もしくはこれより深い肉質部に位置していなければ、索紐をひっぱったとたん、銛は体外へ離脱してしまう。銛の突入の際は、尾部の股に穿たれた茎槽とよばれる孔に圧力が集中する。銛柄を力いっぱい獲物に向かって投げた狩漁者の力は、瞬間的には相当なものであろう。図3-Bにみるように、銛が体内に完全に挿しこまれた場合、獲物は痛みや衝撃を感じて体をかかわして逃れよう

2) アイヌ語の部分名称は [名取, 1940: pp. 146-147] [佐藤, 1938: pp. 67-69] および東京国立博物館・佐々木利和氏のご教示による。

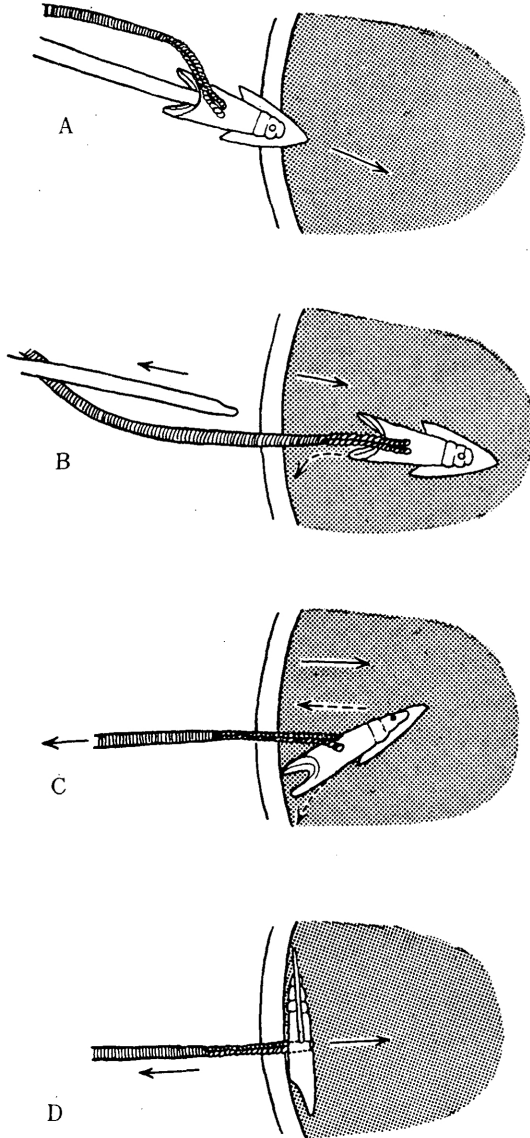


図3 キテの突入・移動・停止のプロセス

とする。また、狩漁者も命中したとみるや索紐をたぐり寄せる。すなわち、獲物と狩漁者のそれぞれの力の相互作用によって、鉈は一定の移動をおこなう。この場合、索孔の位置が鉈の中心近くに位置するため、索孔を急激にひっぱっても、鉈は位置をかえずに突入方向を再びたどることはできない。また、索孔を斜位にしていることも、しばしば見られるが、これも移転運動をより確実にするためであろう。さらに、鉈が後退運動する際、異なった方向に移転させ、離脱を防ぐ装置としてくかえし>が

ある。かえしの尖端は、尖っているものと平らなものの2種があり、前者は硬い外皮をもつもの、後者は軟らかい外皮をもつものに使われる。いづれにしても、このかえしによっても銛はいくらか向きをかえるであろう。銛に付されたいくつかの仕掛けによって、銛は後退する際、内皮にぶつかり(図3-C)、内皮に沿っていくらか移動した後、停止する(図3-D)。銛の停止した状態は、索孔に通された紐が出る側、すなわち銛の裏側が内皮に密着し、索孔と外皮の切れ目はきわめて接近しているものとおもわれる。このような停止状態であるからこそ、トリカブトの毒を銛の鏃に付ける際は、表側に鏃をいくぶん折り曲げ、そこにできた溝に毒を塗り込めるのであると考えたい。裏側に塗ったのでは毒の効果がうすれるであろう。また、中柄は、突入時には体内に挿し込まれるが、突入方向を逆にほぼそのまま後退して体外へ脱け出し、柄とともに海中に浮いて浮子になる。中柄の尖端が折損していれば、銛がすっかり刺っているとみてよいというのは、以上の記述で理解されるであろう[佐藤, 1938: p. 62] [名取, 1972: p. 197]。

これまで図3のA~Dまでの移転運動をかなり詳細に述べてきたが、いうまでもなく、この全プロセスは瞬時に行なわれるものである。また、キテにかぎらず、回転式離頭銛の“回転”という用語は適切でなく、別の用語を考慮すべきである。しかし、現時点では回転式を用いておく。

Ⅱ. 資料検討

ここでは、本論を組み立てるうえで基礎になった資料の観察所見等を述べてみたい。できる限り直接観察につとめたが、所在不明や諸事情によって観察できなかったものについては、既出文献によった。その場合は、末尾に記してある。したがって、ことわり書きのない実測図等は筆者の手になるものである。

なお、記述を簡略にする便宜上、筆者が作成した表の資料番号を用いる。

1 銛の体部表面に彫刻あり。鏃と体部の接する部分には、きわめて厚く松脂様の樹脂が塗り込められていて、両者の境界を明らかにできない。尾部のかえし若干破損。かえしは、翼状に大きく広がっている。尾部側面の形態は、いわゆる片流れである。

2 体部表面に細い線彫による文様あり。側面からみると、尾部は外反している。

3 体部裏面の中央に逆V字形を呈する深く粗い彫り込みあり。銛は銅。体部に10数条の鉄針金が巻かれている。銅針金も数条つかわれているが、鉄のそれにかくれて観察できない。

4 体部表面の尾部に溝状の彫り込み。鏃を留めた銛は銅釘。体部に3~4条の銅針金が巻かれている。

表1 キテ鋳計測一覧

(略記は末尾に表示)

大家
アノメのキテ(回転式離頭鋳)の諸系列

資料番号	採集地名	材 質			計 測 値 () は推定値 単位 mm						本論文 図版番号	資料保管先	保 管 先 標本番号	採集時期
		鋳 部	体 部	付 属	a	b	c	d	e	f				
1	室蘭	銅	鹿角	—	100	52	48	88	38	(46) 43	図 4-1	北大博	9823	1937年
2	室蘭	銅	鹿角	—	94	52	42	80	40	39	図 4-2	北大博	9761	1937年
3	幌別	銅	メカジキ?	鉄・銅の 針金	106	計測不能	計測不能	91	52	47	図 4-3	北大博	9806	1937年
4	幌別	銅		銅針金	105	62	43	86	47	45	図 4-4	北大博	9822	1937年
5	幌別	銅	メカジキ	—	112	72	40	91	50	52	図 8-1	北大博	9789	1937年
6	幌別	真鍮	メカジキ	—	115	67	48	101	48	(43) —	図 8-2	北大博	9779	1937年
7	幌別	真鍮	メカジキ	銅針金	122	81	41	83	59	45	図 8-4	北大博	9805	1937年
8	敷生	銅	鹿角?	銅板	102	59	43	88	43	43	図 4-5	北大博	9824	1937年
9	敷生	真鍮	鹿角	—	111	60	51	91	49	48	図 4-6	北大博	9782	1937年
10	敷生	銅	鹿角	銅針金	97	53	44	78	42	39	図 4-7	北大博	9781	1937年
11	敷生	銅	メカジキ	—	113	68	45	86	46	45	図 4-8	北大博	9775	1937年
12	敷生	銅	鹿角	—	104	64	40	90	45	43	—	北大博	9788	1937年
13	敷生	銅	メカジキ	—	111	68	43	99	45	48	図 8-3	北大博	9777	1937年
14	敷生	真鍮	鹿角	銅針金	111	69	42	97	43	46	図 8-5	北大博	9799	1937年
15	敷生	真鍮	メカジキ	—	111	71	40	89	50	49	図 8-6	北大博	9768	1937年
16	敷生	銅	木	鉄針金	107	64	43	97	48	45	図 8-7	北大博	9765	1937年
17	敷生	真鍮	木	鉄針金	113	61	52	101	47	42	図 8-8	北大博	9778	1937年
18	敷生	真鍮?	メカジキ	金属板	107	65	42	91	39	31	図 8-9	北大博	9773	1937年

資料番号	採集地名	材 質			計 測 値 () は推定値 単位 mm						本論文 図版番号	資料保管先	保 管 先 標本番号	採集時期
		鍍 部	体 部	付 属	a	b	c	d	e	f				
19	室 蘭	銅	木	—	114	67	47	94	41	40	図 4-9	北 大 博	9764	1936年
20	社 台	真 鍍	鹿 角	—	91	51	40	82	39	44	図4-10	北 大 博	9780	
21	社 台	銅	鹿 角	銅 板	107	58	49	94	39	41	図4-11	北 大 博	9769	1937年
22	社 台	銅	鹿 角	—	101	57	44	92	41	44	図8-10	北 大 博	9766	1937年
23	社 台	真 鍍	鹿 角	—	96	49	47	84	36	36	図8-11	北 大 博	9767	1937年
24	社 台	銅	鹿 角	—	101	58	43	85	46	47	図8-12	北 大 博	9762	1937年
25	社 台	銅鉄?	鹿 角	—	98	50	48	計測不能	43	45	図8-15	北 大 博	9763	1937年
26	社 台	銅	メカジキ	—	101	58	43	86	44	40	—	北 大 博	9771	1937年
27	社 台	真 鍍	木	—	118	67	51	102	50	40	図8-13	北 大 博	9783	1937年
28	白 老	銅	鹿 角	—	91	55	36	74	42	40	図4-12	東 北 大		
29	白 老	鉄	鹿 角	—	113	56	57	97	41	38	図8-14	北 大 博	9774	1937年
30	白 老	銅	メカジキ	—	113	65	48	99	53	49	図4-13	東 北 大		
31	白 老	銅	鹿 角	—	104	62	42	90	46	53	図 5-1	釧 路 博		
32	白 老	不 明	鹿 角	真鍍板	(105) 102	(62) 59	43	計測不能	39	44	図 5-2	北 大 博	9824	1937年
33	不 明	銅	鹿 角	—	97	59	38	86	38	(40) —	図 5-3	筆 者		
34	白 老	真 鍍	鹿 角	真鍍針金	86	計測不能	計測不能	64	41	42	図8-16	北 大 博	9770	1937年
35	胆振地方	真 鍍	鹿 角	—	107	58	49	91	36	39	図 5-4	北 大 博	9803	
36	白老?	銅	鹿角?	—	93	53	40	77	37	38	図8-17	東 北 大		
37	内浦湾沿岸	不 明	不 明	—	73	46	27	64	33	29	図 5-5	不 明		

38	虻田	真鍮	鹿角	—	81	44	37	71	29	24	図5-6	北大博	9786	1937年
39	室蘭	真鍮	海獸骨	鉄針金	73	41	32	66	26	26	図5-7	北大博	9831	1937年
40	室蘭	真鍮	鹿角	針金	76	43	33	70	30	27	図5-8	北大博	9839	
41	室蘭	真鍮	海獸骨?	針金	77	45	32	72	29	(32) 29	図5-9	北大博	9829	1937年
42	幌別	真鍮	鹿角	—	87	48	39	78	30	27	図5-10	北大博	9841	1937年
43	幌別	銅	鹿角	針金	99	56	43	88	40	42	図5-11	北大博	9760	1937年
44	幌別	銅	鹿角	—	76	41	35	56	29	25	図5-12	北大博	9828	1937年
45	敷生	鉄?	鹿角	—	87	48	39	80	34	25	図5-13	北大博	9830	1937年
46	敷生	銅	メカジキ?	針金	88	50	38	70	35	26	図5-14	北大博	9834	1937年
47	敷生	銅	鹿角	—	84	47	37	75	33	23	図5-15	北大博	9840	1937年
48	静内	真鍮	鹿角	—	88	52	36	75	27	27	図5-16	北大博	9810	1937年
49	静内	銅	鹿角	—	83	41	42	75	30	28	図5-17	北大博	9833	
50	静内	金属	鹿角	—	77	41	36	66	34	28	図5-18	北大博	9832	
51	春立	金属	鹿角	—	60	34	26	47	28	24	図6-1	北大博	9836	
52	春立	金属	不明	—	74	43	31	62	28	25	—	北大博	9837	
53	不明	銅	鹿角?	—	67	34	33	61	28	27	図6-2	北大博	9801	
54	不明	真鍮	鹿角	—	71	38	33	68	26	30	図8-18	北大博	9802	
55	不明	銅	鹿角	—	77	39	38	(66)	34	22	図6-3	筆者		
56	樺太	鉄	鹿角	—	(97) 93	(57) 53	40	78	(33)	28	図6-4	北大博	9691	1879年
57	静内	真鍮	鹿角	—	114	61	53	99	31	35	図6-5	北大博	9772	1937年
58	静内地方	真鍮	鹿角	—	92	44	48	83	(30)	23	図6-6	北大博	9804	

資料番号	採集地名	材 質			計 測 値 ()は推定値 単位 mm						本 論 文 図版番号	資料保管先	保 管 先 標本番号	採集時期
		鍍 部	体 部	付 属	a	b	c	d	e	f				
59	春立	金属	メカジキ?	—	113	63	50	(98) 88	32	36	図6-7	静内郷		
60	日高地方	金属	骨角	—	96	53	43	81	30	24	図6-8	不明		
61	静内	真鍮	鹿角	—	80	47	33	72	21	22	図6-9	北大博	9796	
62	白糠	鉄	鹿角	—	89	52	37	72	25	20	図6-10	北大博	9790	
63	白糠	真鍮	骨	—	101	59	42	91	28	32	図6-11	旭川博 (旧河野コレ) (クシヨシ)	4590	
64	白糠	鉄	鹿角	—	91	60	31	71	30	23	図6-12	北大博	9792	
65	白糠	鉄	鹿角	—	75	50	25	57	24	20	図6-13	北大博	9793	
66	白糠	鉄	鹿角	—	86	54	32	71	25	20	図6-14	北大博	9794	
67	白糠	鉄	鹿角	—	102	61	41	77	33	34	図6-15	北大博	9791	
68	白糠	鉄	鹿角	—	83	50	33	63	25	24	図6-16	北大博	9795	
69	白糠	鉄	鹿角	—	98	57	41	68	28	22	図8-19	北大博	9797	
70	釧路	鉄	鹿角	—	73	46	27	65	27	18	図6-17	旭川博 (旧河野コレ) (クシヨシ)	4589	
71	釧路	金属	骨角	—	78	42	36	67	23	23	図6-18	不明		
72	釧路	金属	骨角	—	94	49	45	79	25	30	図6-19	不明		
73	釧路	金属	骨角	—	105	61	44	96	29	33	図6-20	不明		
74	釧路地方?	鉄	鹿角	—	92	51	41	77	26	32	—	旭川博 (旧河野コレ) (クシヨシ)	4591	
75	釧路地方?	鉄	鹿角	—	78	42	36	68	17	24	—	旭川博 (旧河野コレ) (クシヨシ)	4592	
76	南千島	金属	骨角	—	(117) 111	(69) 63	48	99	(37)	36	図6-21	不明		
77	北千島	金属	骨角	—	74	46	28	53	(22)	18	図6-22	不明		

78	北千島	金属	骨角	—	92	55	37	63	(37)	26	図6-23	不明		
79	斜里	鉄	鹿角	—	115	70	45	83	29	35	図7-1	しれとこ	26	
80	斜里	鉄	鹿角	—	118	73	45	86	44	33	図7-2	小山田市太郎		
81	滝沸	鉄	鹿角	—	109	71	38	72	30	30	図7-3	北大博	9820	1937年
82	藻琴	銅	鹿角	—	105	65	40	77	30	31	図7-4	北大博	9821	1937年
83	樺太	銅	鹿角	—	95	58	37	75	30	34	図7-5	北大博	9818	
84	忍路	金属	骨角	—	125	77	48	110	40	28	図7-6	不明		
85	余市	金属	骨角	—	89	55	34	75	29	26	図7-7	不明		
86	不明	金属	骨角	—	94	68	26	66	23	21	図7-8	不明	9759	
87	長万部	真鍮	メカジキ?	—	85	51	34	68	29	31	図7-9	北大博	9785	
88	長万部	金属	骨角	—	86	52	34	65	30	31	図7-10	北大博	9787	1937年
89	虻田	真鍮	鹿角	—	67	42	25	45	28	30	図7-11	北大博	9819	
90	長万部	鉄?	骨角	—	80	計測不能	計測不能	65	19	11	図7-12	北大博		
91	内浦湾地方	鉄	骨角	—	98	52	46	88	24	13	—	不明		

略記 メカジキ/メカジキの口吻
 メカジキ?/メカジキの口吻?

北大博/北海道大学農学部附属博物館
旭川博/市立旭川郷土博物館
釧路博/釧路市立郷土博物館

東北大/東北大学文学部考古学研究室
静内郷/静内町郷土資料館
しれとこ/斜里町しれとこ資料館

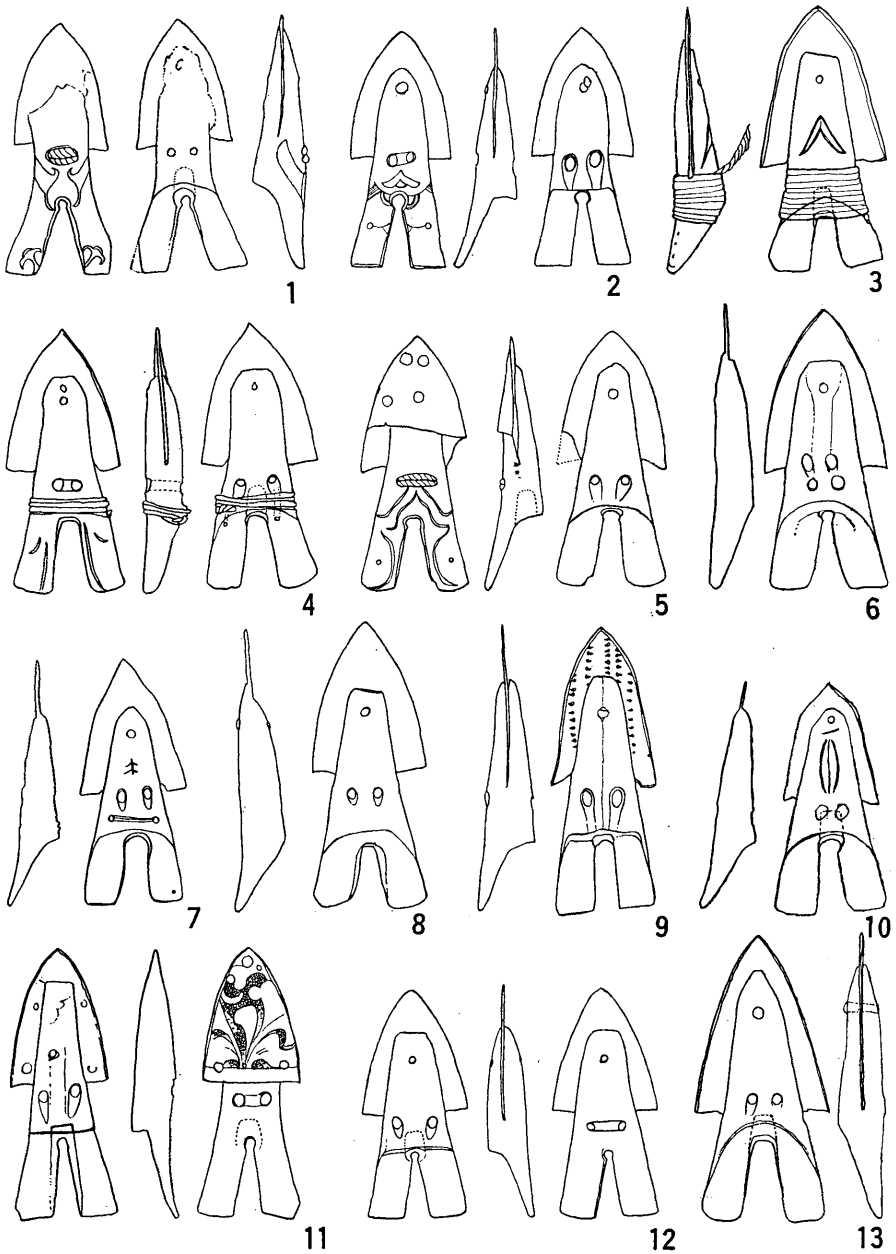


図4 アイヌの鈎 Type A 1-13 (縮尺 1/3)

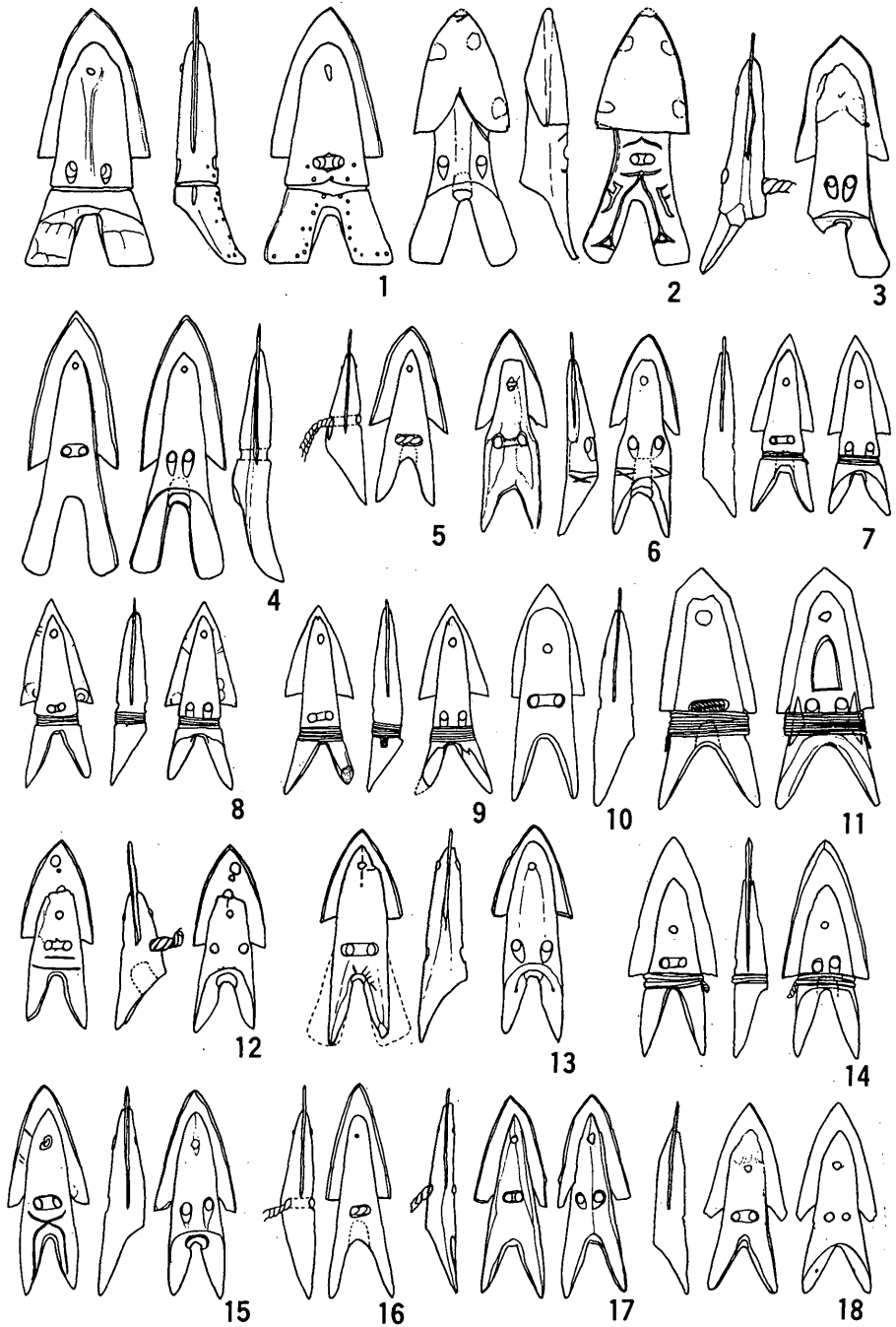


図5 アイヌの鉞 Type A 1-4, Type B₁ 5-18 (縮尺 1/3)

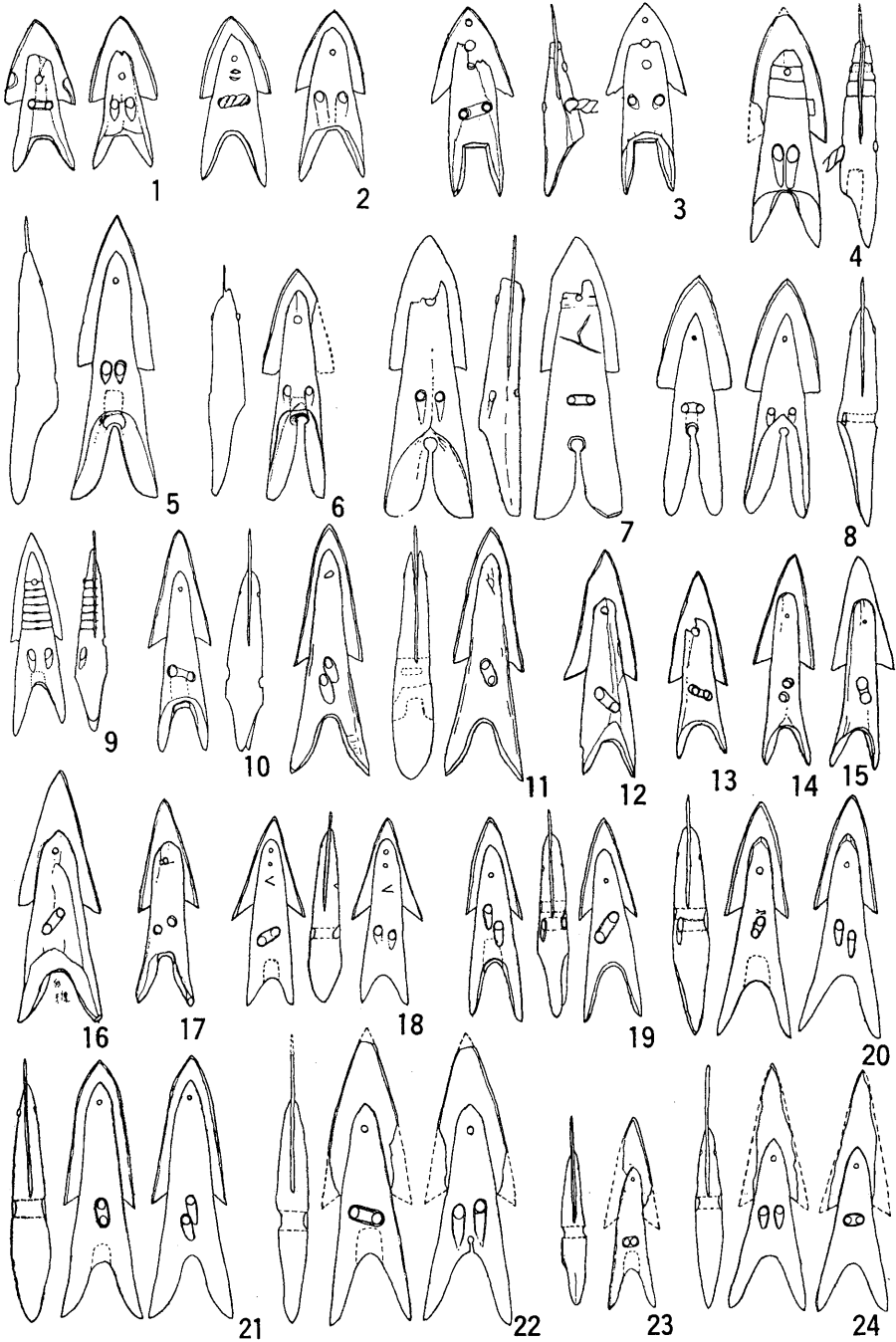


図6 アイヌの釣・Type B₁ 1-4, Type B₂ 5-8, Type B₃ 9-24 (縮尺 1/3)

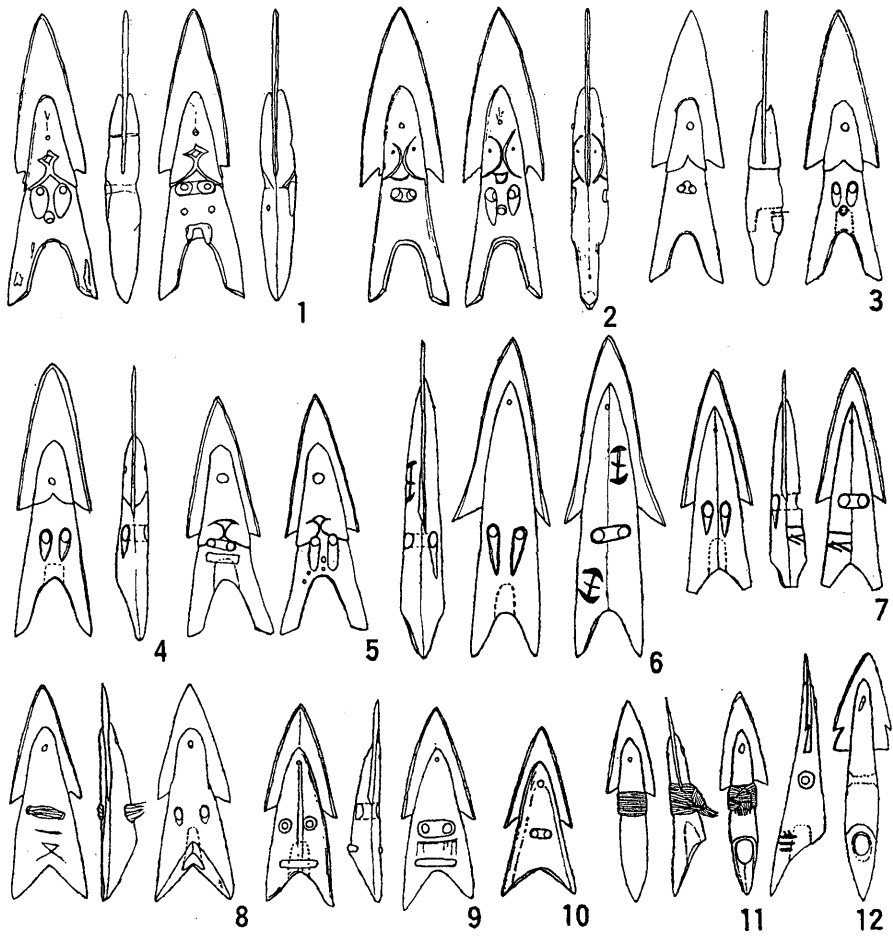
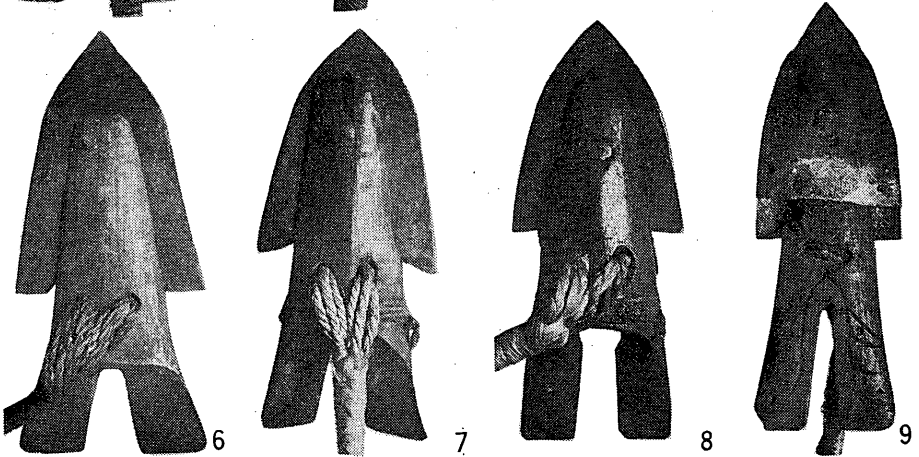
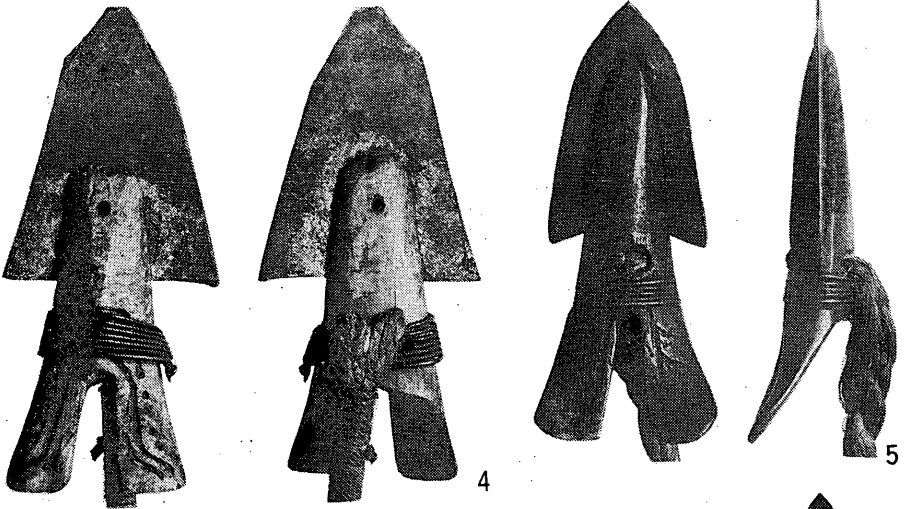
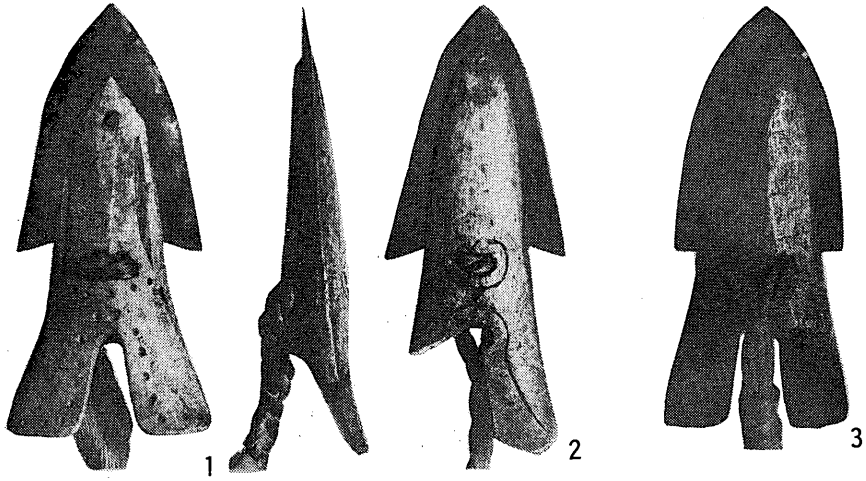


図7 アイヌの鉈 Type B₄ 1-5, Type C 6-7, Type D 8-10, Type E 11-12 (縮尺 1/3)



大塚 アイヌのキテ (回転式離頭鉾) の諸系列

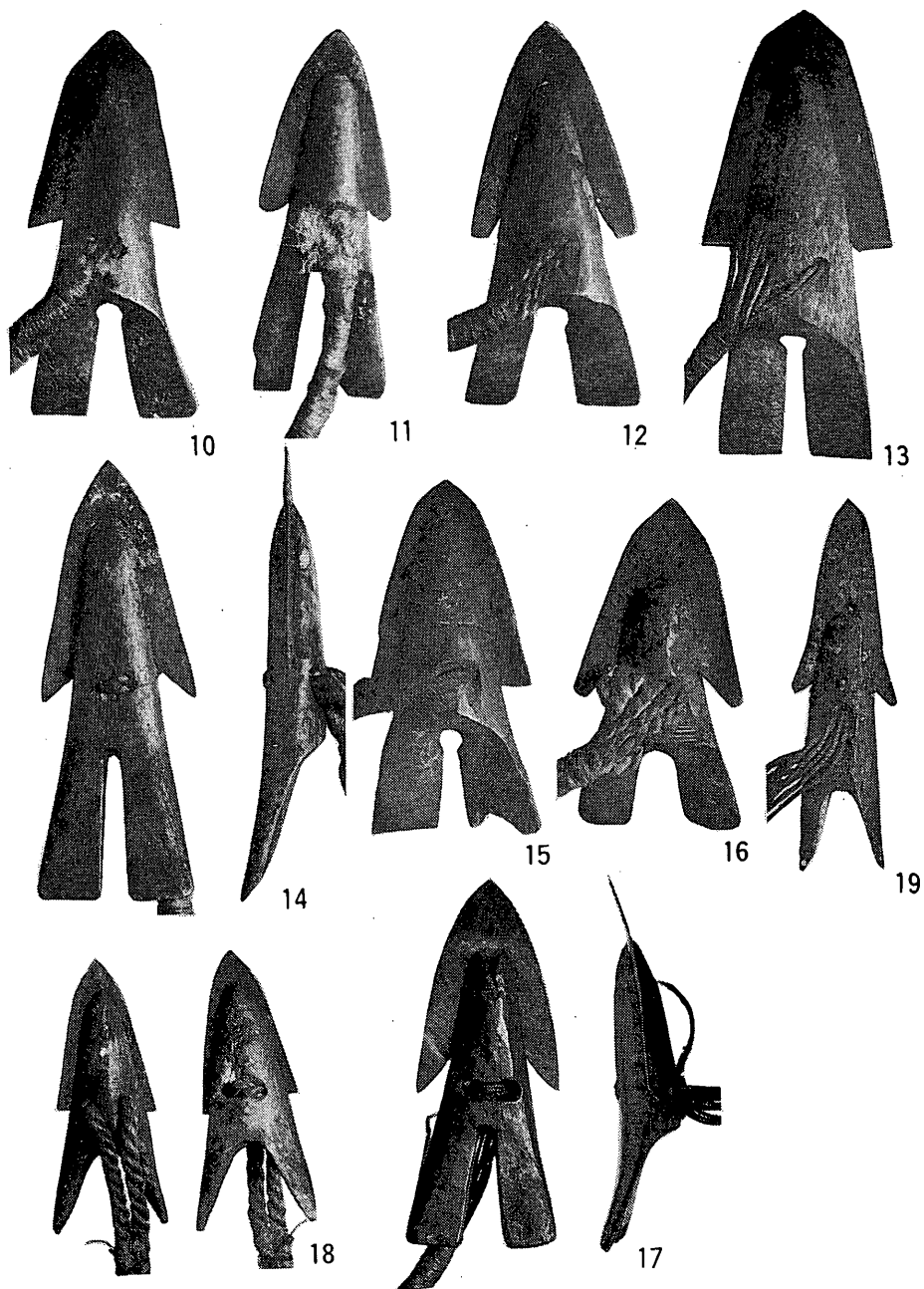


図8 アイヌの鉾 Type A 1-17, Type B₁ 18, Type B₃ 19 (縮尺 1/2)

5 鍬が体部裏面側にいくぶん折り曲げられている。これはシリカップキテ³⁾であるので、曲げた部分に毒を塗布したものではないであろう。また、茎槽の断面の形が、角のまるまった、いわゆる〈おにぎり〉状である。これは、中柄の先端部断面が同様の形につくられたものに対応し、銚と中柄の接合を固定しておくための工夫である。

6 体部表面が線彫りで飾られている。尾部のかえしの一方が欠失。鍬の留釘は木製である。

7 体部表面に線と列点よりなる粗い構成の彫刻あり。鍬は、真鍮板を粗っぽく折り切ったままのもので、体部にくらべて鍬が極端に大きい。体部に数条針金が巻かれている。

8 体部表面に線彫りによる文様がみられる。鍬の部分は表側から別の板をあてて、銅板2枚重ねになっている。鍬のかえしが一部欠失。また右側縁にシロシ様の刻みあり。側面からみると、かえしの付根内側は、体部と直角に削られている。

9 体部表面に線彫りによる文様あり。鍬の留釘は銅。この銚は、最初穿った索孔の位置が不相当であったらしく、その上部に再度穿ちなおしている点が注目される。最初に穿った索孔の一つには、木栓がつけられている。

10 体部は、獲物に命中したときの衝撃で、茎槽から尖端に向かって大きくひび割れしている。この割れ目をつくろい、さらに使用を継続させるため、茎槽の両端に小孔をうがって針金を通し、接合している。また、体部裏面には、シロシとおもわれる彫刻あり。

11 体部の尖端は抵抗をうけるため破損しやすく、損傷すると削ってなめらかにしたらしく、その整形が裏面に残されている。

12 鍬の部分は、オロシガネ特有のトゲが残されていることから、これを再生して用いていたことが明らか。また茎槽の部分には、銅板をまるめて円筒状にしたものを挿し込んである。これは、茎槽がたびかさなる使用で摩滅したためにとられた処置であろう。茎槽が割れるのを防ぐために考案されたのならば、これ以外に類例があってよいであろう。鍬一部欠けあり。

13 かえしの一方がわずかに欠損している。鍬の留釘は鉄。

14 体部表面のかえし部分に線と列点によって構成される彫刻あり。また、体部の茎槽の位置には、溝が一周して彫られ、そこに針金が5条巻かれている。

15 索孔は横位であるが、かなり尾部寄りに位置している。

16 体部が木製のものは、あまり類例がない。堅木を用いている。体部に3条針金

3) シリカップ *shirkap* はメカジキのこと。

を巻いてある。

17 鏃の留釘は銅。体部には、針金が数条つよく巻きしめてある。

18 体部表面の尾部には、線と列点による彫刻あり。尾部の一方の尖端わずかに欠失。表面から鏃の部分に、別の金属板をあて、周縁を6カ所鉸止めしている。かえしの部分を削り出す際、最初に刃物を入れた溝が残されている。最初の位置では、あまりに尾部が長すぎるため変更したとみられる。

19 鏃はオロシガネを再利用している。

20 体部の裏面上部に、柳葉形の彫り込みがある。ここにトリカブトの毒を塗り込んで用いたとみられる。

21 鏃の部分は、表面側に別の銅板を重ね合わせて、5カ所鉸止めしている。表面の銅板は、タガネで細密な文様を浮きだした古金具を利用。鏃の尖端近くには、樹脂様の付着が著るしい。

22 鏃の顎の部分は、いくらか尖端が尖っている。

23 かえしの部分尖端が、いづれもわずかに欠失。

24 鏃の部分に樹脂様の付着が点々とみられる。

25 当初からの鏃の両側に銅板をあてて、5本の鉸で止めている。つまり鏃は3枚の金属板で成っている。当初の鏃は鉄のように観察される。

26 鏃が索孔の位置よりやや下方にまで挿し込まれている。

27 実際に使用された形跡は見受けられない。茎槽は正円に穿たれている。

28 鏃は、装飾板を利用している。松脂様の付着あり。

29 全体に体形は細身で、鏃に松脂様の付着多し。双方のかえしの部分があまり開かないが、切り込みが深く、したがって大きなつくりになっている。鉸は銅製。

30 体部右側縁に最も新しい切痕がみられる。意図不明。鉸は鉄釘。

31 尾部のかえしの部分が短かく、全体にずんぐりした形態である。体部を一周する浅い溝が彫られているが、針金を巻くためのものであろう。また体部表面の下半部には、列点による装飾がみられる。原図 [金盛, 1970: 図2]。

32 体部表面には、かなり入念な文様が彫刻されている。鏃の両面は、真鍮板を2枚重ね合せ、4カ所鉸留めしている。

33 体部裏面の先端周辺には、樹脂様の付着物が著るしい。尾部の一方が根元より折れて失なわれている。これは、獲物に突き刺って移転する際に、うまく運動せず、欠失した方のかえしに激しく圧力がくわわり過ぎた結果とみられる。つまり、獲物に鉾が射込まれたあと、獲物の逃げる力と漁者のたぐり寄せる力がうまくバランスがと

れていれば、銚はゆるやかに移動する。そして獲物にうがたれた銚の突入裂になるべく索孔が接近することが理想的な繫留状態である。本例は破損の遺存例として珍しい。

34 銚の顎の部分が強く表現されているが、その先端はまるく擦りとられて尖っていない。これは、尖っていると獲物の体内で移転するどころか、皮を切りさいて脱け落ちてしまうからであろう。茎槽を補強する目的で、この両端に孔をあけ、表裏より針金を数条巻きつけている。

35 全体にすず付着。報告者 [名取, 1972: p. 18] によれば、「シリカップキテの典型的な造り」という。しかし、これまでみてきた銚の仲間としては、いささか特異な感じを与えるものである。それは、全体に細身であり、尾部のかえしの形状も異なることに起因している。本例をもってシリカップキテの典型とみることには問題がある。原図 [名取, 1972: 図版 1-6]。

36 体部の先端が表裏ともわずかに損傷している。銚は、顎の部分が鋭く尖っており、あまり擦れていないのは注目される。しかし、尾部の拡がり具合などからみて、銚の顎はそれほどの抵抗機能をもちえないとみられる。

37 かなり小形で、尾部のかえしの先端が尖っていることが特徴。報告者 [名取, 1972: p. 184] によれば、「キナボキテと呼ばれてゐる」⁴⁾ という。原図 [名取, 1972: 図版 1-8]。

38 標本ラベルによれば「イヨーキテ *Iōp-Kite*」とあるが、どのような意味か判然としない。体形が特異で、体部中央でくびれている。また表面では、索孔に導く溝彫りが、必要以上に長く施されている。さらに裏面中央の両端に記号様の線彫りあり。茎槽の彫りは、他の銚にくらべて深く、14 mm ある。なお、この銚は、かつて虻田郡虻田町字本町、妻木宇三郎所有のものであった。

39 体部に茎槽をとりまく溝が彫られ、そこに針金が数条巻かれている。小形ながら強固なつくりといえよう。

40 体部には茎槽を強化するための針金が数条まかれ、その針金は、抵抗を少なくするため溝に埋めこまれている。尾部のかえし部は双方の長さが異なっているが、その理由は確定できない。おそらく、一方の先端が使用中欠けてしまったためか、移転する際に突入裂から脱けだしてしまうことを防ぐためのしかけとも考えられるが速断はさしひかえたい。

41 体形は、40に近似している。尾部のかえしの一方が欠失。獲物体内で移転運動した際にかえしの一方に急激に力が集中した結果、破損した好例といえよう。それは、

4) キナボ *kinapo* はマンボウのこと。

かえしに加えられた衝撃の軌跡を観察すると、裏面より表面方向にぬけていることから明らかである。また、体部に数条の針金が巻かれているが、結束部分をていねいに溝を彫って収めているしごとぶりに注目したい。

42 本体の形状は、後述する Type B₁ 系列のものとしては特異である。ことに体部上半の面が大きいことと、茎槽付近のえぐり込みのつくりをみて判断するに、Type A⁵⁾のものを改造したとみなしたい。

43 この鉞は、まことに特異な形状をもっている。しかし、大きいことを別にすれば、Type 分類上は B₁ としてよいであろう。体部裏面上半に砲弾状の切溝 1カ所、中央両端にそれぞれ三角状の切溝がもうけられている。名取によれば、「これにブシ毒をぬってイルカを突く」という。体部には、10条前後針金が巻かれている。名取によると、採集地は白老付近となっている [名取, 1972: p. 183]。

44 体部側面をみると、体形に対してきわめて部厚いつくりである。37のキナボキテに類似する。また、体部下半が黒くすすけたようになっている。なにか塗布したものかも知れない。鏃は、もともと地金に孔のあいていたものを再生してつくられている。

45 体部下半両側が表裏面に対して直角に近く再整形された痕が明瞭に観察される。また体形からしても、もとは Type A であったものを B₁ に改造したと断定してよい。改造時の切痕をもとに、かつての Type A の時におけるかえしを点線で復元しておいた。茎槽が深くうがたれ、索孔の位置すれすれまでのびている。

46 茎槽のつくりはきわめて浅い。また、体部に数条の針金が巻かれているが、これを埋めこむ溝は切っていない。鏃は先端が 2 mm 前後を測るほど肥厚している。部分的に樹脂の付着あり。

47 体部表面下半には、X字状の沈線が施されている。鏃は銅鉞で留めてある。名取によれば、内浦湾採集となっているが、ラベルによった [名取, 1972: p. 184]。

48 名取によれば、「小形で胆振のキナボキテと同型」と述べられている [名取, 1972: p. 184]。原図は [名取, 1972: 図 1-7] による。

49 鏃や全体のつくりが雑である。

50 鏃と体部の接するあたりには、樹脂様の付着が認められる。鉞は真鍮製。

51 きわめてすずまりの小形である。鏃は、なにかの装飾板を再利用しているが、原形は分らない。

52 51よりいくらか大きい鉞であるが、これと一対をなして使われたものとみられる。

5) type 分類については、後述する。

53 体部表面上半に、舟形の刻みが2つ、2条に彫りつけられている。鋳は銅。これは54と一対をなして使われたとみてよいものである。

54 体部にひびが入っている。鋳が細身であるが、体部は53と大きさ形態とも近似。

55 体部先端が両面とも損傷している。体部は、かなり粗い削り方で形づくられている。

56 体部両面先端に横位に3条の沈線が走っている。鋳は顎尖端の一方などが欠損している。茎槽の彫り込みはかなり深い。なお、本鋳は名取の図4-2 [名取, 1972: p. 190] に相当するとおもわれるが、そこでは復元的に描かれている。また、本資料は、鋳本体の他、中柄のついた索紐などの付属品が完全に揃っている。

57 体部は全体に細身であるが、かえし部のつくりの大きいことが特徴。ことに、かえし部の内縁がゆるく弓なりに曲がり、さらに尖端が急カーブにつくり出されている。

58 尾部かえしを大きくつくり出したため、全体のバランスから索孔と茎槽の位置が接近している。鋳の片側が大きく欠失している。

59 体部尖端は、両面とも若干破損している。表面上部には、イトツパ *itokpa*⁶⁾ 様の彫り込みあり。その尖端には、横走る線刻の痕跡が残っている。

60 全体に細身で、尾部が長くつくられている。原図名取, 図版2-1 [名取, 1972: p. 188]。

61 体形は全体的にみて細身である。体部上半の裏面には、横走る7条の美しい線刻あり。かえし部の一方の尖端が若干破損している。また側面の形態がいわゆる紡錘状である。とくにかえし部の側面をみると、反りがなく、シンメトリカルであり、いくぶん両縁の線が内彎している傾向にある。手づれした色調などからみて、かなり使いこまれた鋳である。

62 本鋳は、つくりが粗雑で、とくに鋳留め部分はぐらついて不安定であり、体部の切痕もなまなましく、参考資料として製作されたものであろう。当然ながら未使用。

63 一対をなす索孔のそれぞれの孔の位置が、この Type B₃ のものの中には、他の横位のものとはちがって、強い斜位をとるものがすくなくない。本例はまた、側面の形態が典型的な水滴状である。かえしの先はするどくないが、側面積は大きくなっていることに注意したい。原図は其田良雄。

64 全体的に粗っぽいつくりで、とくに鋳は形がととのっていない。体部には墨の

6) *itokpa* には、エカシ イトツパ *ekashi-itokpa* とカムイ イトツパ *kamui-itokpa* の2種があり、前者は家紋、後者は神紋である。

ようなものを塗って古色をだしているが、参考資料としてのレプリカで、未使用であるとおもわれる。

65 粗いつくりでレプリカとおもわれる。鍬は鉄。

66 粗いつくりでレプリカとおもわれる。索孔が縦位に近い斜位である。鍬は鉄。

67 体部、鍬とも粗いつくりで、レプリカである。索孔は斜位。

68 粗いつくりのレプリカ。

69 粗いつくりのレプリカ。しかし、索孔の位置が縦位に近いものであり、鍬も顎部が外反するなど、見落すことのできない特徴をもっている。

70 体部両面の上半にく字状の彫り込みあり。所有者を表わす記号とおもわれる。側面の形態は、水滴状である。名取によれば、「小動物の狩猟に用いられる」とのこと [名取, 1972: p. 184]。

71 かえし部の長さにちがいがあがる。索孔は斜位。側面は紡錘状の形態。用途は名取によると70と同じ [名取, 1972: p. 184]。原図 [名取, 1972: 図版 2-5]。

72 体部尖端は両面とも若干二次整形されている。索孔は斜位。茎槽はかなり巾広いつくりである。側面は紡錘状の形態をとる。原図 [名取, 1972: 図 2-4]。

73 索孔は縦位に近い位置関係にある。側面は紡錘状の形態をなす。鍬の刃部は、体部中央まで長くのびている。原図 [名取, 1972: 図版 2-3]。

74 索孔の位置は斜位。鍬のかえしは鋭角をなし尖っている。茎槽は浅く巾広い。側面は紡錘状の形態。

75 索孔は斜位。鍬は使用による摩耗が著しく、体部に沿って2mm巾程度残存している。また、かえし部は摩滅して残っていない。鍬はつねに鋭い刃部をもっていないとはならないので、におくなると砥石などでみがいて再び鋭くしたものであろう。そして鍬が使用に耐えられなくなるまで摩滅したときは、鋌をはずして捨て去り、別の金属片でつくった鍬を挟み込んだものとおもわれる。側面は紡錘状の形態。

76 索孔はいくぶん斜位。茎槽はかなり大きくつくられている。裏面から茎槽にカギ穴状の小さな切り込みが彫られているが、どのような目的によるのか明らかでない。中柄からの強い衝撃によって茎槽が破壊されるのを防ぐためか、それとも中柄の抜去を容易にするためと考えられる。側面形態は紡錘状。鍬は尖端とかえし部が破損。原図 [名取, 1972: 図版 3-3]。

77 索孔は横位。側面形態は紡錘状。鍬はかえし部周辺が大きく欠失。原図 [名取, 1972: 図 3-5]。

78 索孔は横位。側面形態は紡錘状。鍬はわずかに尖端を残して、刃部が全面的に

欠損。原図 [名取, 1972: 図版 3-4]。

79 体部中ほどにわずかな段ができています。これは、これより上部に構成される \times 字状を基本単位とするモチーフの表わし方にもなう特徴である。両面のモチーフは同じ。索孔は横位。表面の索孔の直下に一对の浅いくぼみがみられる。装飾的意味でなされたようにおもわれるが、確かなことは分らない。茎槽は、腔内から表面に向けて走った衝撃によって、一部破損している。これは、使用によるものであろう。茎槽の奥から細い孔が裏面に通じている。この孔は、茎槽に挿入される中柄と結びついた役割をもつものであろう。おそらく、鉾が獲物に突きささる際の強い衝撃は、茎槽の奥壁に集中するので、ここにわずかな気泡があると圧縮されて、ときには亀裂や破損を生じかねない。これを防ぎ、衝撃をやわらげるためのしかけと考えたい。したがって筆者はこれを気孔とよぶことにする。しかし名取はこれを「茎槽内の夾雑物を除去するのに便利」と述べている [名取, 1972: p. 184]。また、詳しい説明はないが、血抜きとする説もある。かえし部の尖端近くの内側が明らかな角をなすことも、この type の特徴である。体部側面は、紡錘状に近い形態を示す。鏝は鉾留してから整形しているらしく、かえし部には二次的に擦り切った痕が明瞭である。もと斜里郡斜里町海別、広田好太郎所有。原図は金盛典夫。

80 体部上半には \times 字状を基本単位とする彫刻が両面にある。 \times の両端に浅い一对の点刻があるが、これは79にみられたものと似た性格のものであろう。茎槽には気孔が伴う。茎槽の断面は四角形。体部側縁に段をもっていない。側面の形態は、左右対称形で、いわゆる紡錘状の仲間。もとの所有者は79に同じ。原図 [金盛, 1970: 図1]。

81 体部側縁に段をもつ。また茎槽に気孔を伴っている。かえし部尖端寄りの内縁に明瞭な角をつくっている。体部には記号様の彫刻はないが、この鉾には索紐と紐止めと一緒に遺存しており、ことに木製の紐止めにはイトップパが刻みこまれている。

82 体部側縁に段をもつ。鏝は厚さ2mm程の銅板でつくられている。また鉾は銅製。かえし部内縁に角をもつ。諸特徴より Type B₄ に含まれるとみなしたいが、側面のかえし部の形態が片流れであることが異なる。

83 体部側縁に段をもつ。体部中央の両面に \times を基本単位とする彫刻がある。表面の気孔があるべき位置に、横位に長方形の彫り込みがあり、そこに植物性繊維片がていねいにはめこんである。目的不明であるが、気孔のような機能をもつものかもしれない。裏面の茎槽周辺には、浅い点刻が4カ所みられる。かえし部内縁に明瞭な角をもつ。

84 体部は、きわめて直線的なタッチで削り出されていることに特徴がある。ことに、尖端が尖っていること、長軸方向を走る真直のな稜をもつことである。体部を平面的にみるならば、およそ鋭利な頂角をもつ二等辺で構成されている。体部表面には、上下に一对のイトoppaがやや斜位に刻まれてある。索孔はわずかに斜位に置かれている。側面形態は紡錘状である。鏃は、左右非対称で、刃部がいくらか外反する。したがって、かえし部は鋭く突き出ている。原図 [名取, 1972: 図版 4-1]。

85 全体的に直線的な構成。ことに尾部の処理が直線的であることに注意したい。かえし部の先端を平らに切っているのは、えぐりを直線に削り取ると、尖りすぎてしまうためである。体部表面の左下部に記号様の刻みあり。体部の稜は両面があり、この切断面は菱形をなす。原図 [名取, 1972: 図版 3-6]。

86 体形は、ほとんど 85 に同じ。ただし、鏃が体部尖端からかなり長くのびていることが異なる。体部表面に左下部に井字形の刻み込みあり。原図 [遠藤・毛利, 1940: 図 23-7]。

87 体部表面はほぼ平坦であり、裏面は長軸中心がもりあがって稜をつくっている。つまり、体部を横に切断すると三角形をなしている。体部表面下方には、又なる刻みがある。彫りあとからみて、当初にはなく、新しく付け加えられたらしい。尾部のえぐりは、直線的に鋭利な刃物で截断されている。また鏃は、表側に刃部をいくぶん折り曲げてある。名取によれば、「先金の湾曲部にブシ毒をぬって鯨を突く」という [名取, 1972: p. 183]。鉞は真鍮。[名取, 1970: 図版 1-3] と同一の鉞であるが、体部尖端の表現が異なるため、筆者の実測図によった。

88 体形全体は 87 に近似している。茎槽の両端を両側より補強してあるが、樹脂状のものが厚く付着しているので、詳しく観察できない。鏃は刃部を表側に向っていくらか折り曲げてある。側面の尾部の形態は片流れになっている。これも毒を塗って鯨突きに用いられた [名取, 1940: pp. 137-138]。もと長万部村, 小倉範三郎所有のもの。

89 ラベルに「*Iōp-Kite*」と記入あり。旧所有者も 38 に同じ。ラベルによれば, 38 と名称は同じであり, 若干, 形態の異なる点はあるが, 型的には同じカテゴリーに含まれるものである。それは, 体部表面が平坦であり, 裏面は稜をもつものであること, 尾部のえぐりが 89 のそれに近いことなどである。

90 体部は, きわめて細身で, かえしが 1 つのいわゆる単尾である。索孔はなく, 体部中央に直接索紐を結びつけている。この索紐の結びの方向は, 裏面にくるように

なっており、これは、本州地方沿岸にみられる<ツキンボ>⁷⁾のそれと同じであることは興味ぶかい。鏝は表側にいくぶん反っていることも注意しておきたい。この鏝の用途は、名取によれば小動物の狩猟に用いるとのことであるが、具体的には不明である [名取, 1972: p. 183]。[名取, 1972: 図 1-1] と同一であるが、実測図に差異があるため筆者のものを用いた。

91 体部は 90 にほぼ同じ形態であるが、索孔が側面にうがたれている。このような索孔のあり方は、北海道の縄文時代に出現するのであるが、両者の関係についてはここでは論じない。また側面下部に記号様の刻みあり。鏝は、かえしが2段になる特異な形である。原図 [名取, 1972: 図版 1-2]。

Ⅲ. 型式設定とその分布

前述した資料の検討によって、キテの型式を次の 8 つに設定することが可能である。それを分布図にあらわしたものが、図 9 である。

1. Type A (資料番号 1~36)

アイヌのキテのなかで最も大形のグループである。体形には若干変化がみられ、とくに体部の側縁が直線的なものと彎曲するものがある。索孔は、一対で横位に限られている。茎槽は体形の比率からみてあまり深くなく、他の鏝と同様のつくりである。尾部のかえしの形状に特徴があり、大きく翼状に拡がり、その先端は尖らずに平らである。つまり、コの字状を呈する。尾部の股の形状は、付根に半円状の小さな彎曲部をもつものが多く、そこからほぼ直線的にかえしの内縁がつくり出されている。側面からみると、尾部は裏より表に向って斜めに切りとられており、いわゆる片流れである。切りとる際に、裏側に段をつけるものとつけないものがある。段をもつものは、当然のことながら、尾部のはじまりが直線であり、もたないものは、アーチ形のラインをとる。鏝の形は頂が尖ったアーチ形が多いが、頂よりいくらか下方に角をもつ、いわゆる将棋の駒に近い形のものもある。また、鏝の片側もしくは両側から別の金属板をあてて補強している例がかなりみられる。

この Type A のキテは、シリカップ-キテ *shirkap-kite* (メカジキ鏝) といわれ、専らメカジキなどのように外皮が軟かいものに用いられた。かえしの先端が平らにつくられているのは、軟かい外皮をやぶらないようにするためであり、また、大形なのは、

7) 筆者は、現在ツキンボ用の鏝に関する分析については別稿を用意している。鏝本の形態分類や出自・系統等について論じることは、これにゆづりたい。

とえば、37、44、45、47、55など、側面の厚みがあって、ずんぐりした特徴のキナボキテ *kinapo-kite* 類似のもの、あるいは、39~40のような、室蘭だけに集中して存在し、細身でかえしが外反して鋭く尖っているものなどのグループである。しかし、前者のグループのなかで確実にキナボキテとされるのは37と47だけであり、この両者に近似するものをどの範囲まで含めるかによって型式内容はかわり、現状では細分しない方がよいとおもわれる。つまり、この Type B₁ は、Type B 系列のなかで型的に分離できるものを除いたすべてが含まれているといつてよいであろう。

Type B₁ の体形は、さまざまな形と大きさのものがあるが、長さに対して幅が大きく、全体にずんぐりした印象を与える。ことに特徴としては、尾部のかえしの尖っていること。また、索孔の位置が例外なく横位であること。さらに、側面から尾部をみた形態は、裏面から表面に向って斜めに削りとられた“片流れ”であることである。

分布をみると、内浦湾にはわずかに知られる程度である。これに対して胆振沿岸西部の室蘭、幌別、敷生に集中して確実に存在する。胆振の東部沿岸には当然存在したであろうが筆者は未見である。さらに日高沿岸の静内、春立にみられる。また、56の資料は樺太であり、この資料のもつ意味をどのように理解すべきかは今後の課題としたい。本 type の樺太におけるあり方が解明されないことには、56は胆振、日高地方よりの移住者がもたらしたものなのか、にわかに断言できないからである。

捕獲対象が明らかな資料は前述のキナボキテの他、43のヌサパロキテ *nusaparo-kite* がある。*nusaparo* はイルカのことであるが、知里真志保によると「吻端がスット切断したようになっているものだという。イルカではなくマッコオクジラだという者もある」という [知里, 1962: p. 174]。

キテは一般に、1本の柄に1本の中柄が添えられ、その先端に1つだけ着装されるものであるが、中柄を二股や三股にしたものも存在した。名取武光によれば、「ラスバの1本のをエアンラスバ又はアレンベと言ひ、鯨や鮪を突くのに用いる。2本のをツウレンベと言って、ブリやオットセイを突く。3本のはレウレンベと言って、同じくブリやオットセイを突く」という [名取, 1940: p. 105]。これを聞きとった場所は明らかでないが、おそらく内浦湾から胆振沿岸あたりであろう。なぜならば、1799年(寛政11)に村上島之丞によって著された『蝦夷島奇観』⁹⁾には、長万部付近のオットセイ猟に2つキテをもつツウレンベを用いているものがしばしば描かれているからである (図10)。また、3つのキテをもつものは、北海道のオットセイ

9) 『蝦夷島奇観』の1863年(文久3)の写本 [福井編, 1937: p. 180] には詳しく図示してある。[BATCHELOR, J., 1925: p. 407] には、このツウレンベの図がある。最も詳細なのは [名取, 1940: 図3] である。

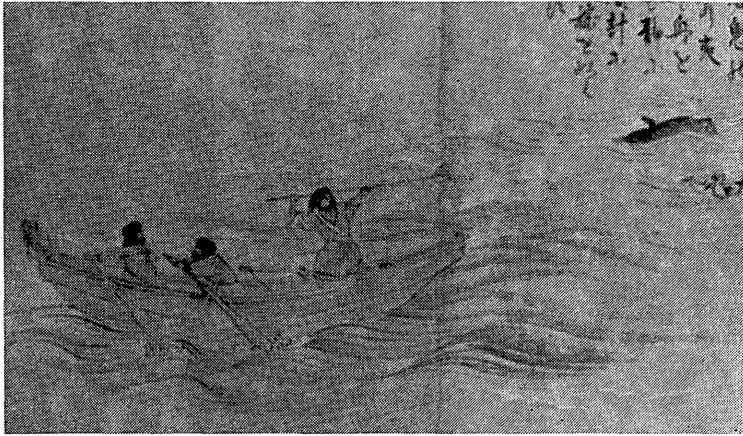


図10 二股鉞によるオットセイ猟『蝦夷島奇観』より

猟につかわれると記された図が『日本水産捕採誌』にみえる [農商務省水産局, 1912: p. 43 図 26]。

これまで述べてきたのは、本 type の鉞のうち、あるものはオットセイ猟にも使われた可能性がとくに強いことを主張したかったからに他ならない。つまり、資料51と52, 53と54は、まさしくツウレンベであろう。ツウレンベとは、2つずつを意味する *tup-ranke* であるとおもわれる。このように本 type の鉞はマンボウ、イルカに限らずオットセイなどの海獣も捕獲する多目的な対象に用いたとみてよいであろう。また、45のように改造した事実からみて、Type A や Type D など対象が特定されるものを除いて、かなり幅の広い使われ方をしていたとみたい。

(2) Type B₂ (資料番号 57~60)

本 type の鉞は、全体がやや細長く、とくにかえしの内縁がふかく抉りとられているため、尾部の占める部分は大きくなっている。索孔は横位である。分布は静内、春立を中心とする日高沿岸である。本州の太平洋岸を黒潮によって北上したメカジキは、7~11月にかけて胆振から日高沿岸を回遊して、太平洋東方に去っていく。これらの地方まで北上するメカジキは体長の大きい成魚である。まず、7~9月にかけて体長155~165 cm の大形魚群が回遊、ついで9~11月に135 cm 前後の中形魚群が、これを追ってくる [中込, 1958: pp. 322-325]。57の資料について名取武光は、「胆振のシリカップキテに近い」と述べているが同感である [名取, 1972: p. 184]。この Type B₂ は35の資料を介させると Type A と形態・分布においてきわめて似縁な関係にあることが理解できよう。この鉞は Type A と同じくメカジキを専ら捕獲する

ものであったとみてよいであろう。但し、58や60のような小形のもの、メカジキ以外にも転用されたこともある。

(3) Type B₃ (資料番号 61~78)

この type には、アイヌのキテのなかで最も細身のものが含まれている。体部の両側縁が直線もしくは、いくぶん外反する線をたどる。大きな特徴としては、索孔の位置が横位よりも斜位もしくは縦位をとるものが多くみられること。また、側面から体部をみると、尾部に反りがなく、いわゆる紡錘状もしくは水滴状の形態を示す点である。また、この type の銚は、全体のプロポーショナルでみるとかなり強い近似性を持っているが、体面積で比較すると、大小さまざまである。ことに、70のように小形であっても側面積が広いものが少なからず含まれている。63, 73のように Type B₂ と大きさを較べるとあまり変わらないものがあることに注意したい。釧路付近でさかんに捕獲されたメカジキ漁にはこの種の type が適しているとおもわれる。かえしの尖端が側面で見るとまるくなっているのは、Type A における平坦なそれと同じ意味ではないだろうか。

分布は、日高沿岸の静内に1点知られるほか、白糖、釧路、南千島、北千島である。つまり北海道東部から千島列島全域であり、これは筆者が墓標の形式によって区分した系統Vとはほぼ一致することは興味ぶかい [大塚, 1975: pp. 32-41]。

(4) Type B₄ (資料番号 79~83)

この type は、きわめて強い斉一性を示すものである。体部の中ほど、もしくはこれより上部にわずかながら段がつくりだされている。これはㄷ字状もしくは人状を基本単位として構成されるモチーフの末端にあたる。このモチーフは例外なく両面に施されている。藤村久和らは、80の資料について、このモチーフはキテイトップ *kite-itokpa* (銚の紋の意) であり、エカシイトップ *ekasi-itokpa* (祖先の紋=家紋の意) でもあるとしている [藤村・平川, 1975: pp. 39-40]。家紋だとすると、81・82にはそれがなくなることになる。家紋をつけるものとつけないものはどのようなことに起因するのであろうか。また、イトップ自体についての性格づけがあまり明らかでないので、これについても追求してゆかねばならない。尾部の形状もきわめて特徴があり、それはかえし部の尖端寄りの内縁に対称的に角ばった個所があること、尖端は角をつくらぬことなどである。また、銚を投げたときに生ずる茎槽に集中する強い衝撃から茎槽の破損を防ぐため、気孔を設けている例が多いことも特徴。索孔はいづれも横位。

側面の形態は、82を除いて紡錘状である。82はやや片流れとなっている。

分布をみると、斜里・濤沸・藻琴という、斜里から網走へかけての狭い地域であるが、樺太にも1例ある。資料が乏しいので断言はできないが、本来の分布は、樺太、宗谷から斜里までのオホーツク海沿岸に広がっているものかも知れない。

3. Type C（資料番号 84～86）

体部は、金属利器の鋭利な切断面の美しさによって装飾的效果をねらった鉞で、デザイン的にはすぐれたものといえよう。できるだけ直線的につくりだしており、体部の中央に真直ぐな稜を形成している。索孔はいつでも横位。尾部の扱りは八状に直線的に切削されている。かえしの先端は84のように尖っているものもあるが、多くは先端を斜めか平坦に切断している。縮尺不明のため図示できなかった86および上磯郡釜谷村の例 [農商務省水産局編, 1912: pp. 43-44] は、かえし先端が直線的に切断されている。釜谷例を除いて、いずれも体部にイトoppa様のものが刻まれている。側面からみると紡錘状に近い。分布は忍路、余市といった、石狩湾西部より日本海沿岸に南下、津軽海峡に面した釜谷までの範囲をひとまず考えておきたい。

4. Type D（資料番号 38, 87～89）

体部の形態は、ほぼ2等辺3角形に近い。尾部の扱日も八字状に近く直線的に処理されている。また、表面が平らに削られ、裏面には中央にやや稜ができることも大きな特徴で、体部の切断面は3角形に近い。索孔は横位。87・88にみるように、鉄の縁をいくぶん表面側に折り曲げ、そこにトリカブトの毒を塗りこめて、鯨を仕止めるのに使用された。38のキテは、諸特徴からこのtypeに含めるべきと考える。38は89と同一の者によって使用された。分布は内浦湾沿岸の長万部・虻田に限定されている。

5. Type E（資料番号 90～91）

体部の細身で、切断面は円に近い。かえしが1つで、いわゆる単尾鉞である。他のキテの系列とはまったく異なる型式である。90には索孔がないが91にはある。しかし、索紐をつける方向は同じで、本州および以南にみられるツキンボの鉞と材質の点を除けばきわめて近似している。すべて鉄でできているツキンボの鉞を骨と鉄片で模倣したものかどうかは、にわかに断言しにくい。なぜならば、余市フゴッペ洞穴出土の後北式土器に伴う、きわめて類似した鉞がすでに存在しているからである [名取武光編, 1970: p. 106, 図版 31-69]。この伝統をひいているものとも考えられるか

らである¹⁰⁾。この type の銚は2例しかなく、 確実には長万部に存在したが、 91について名取は内浦湾地方とのべているので、 かつては湾内一帯で使われたとみてよいかも知れない [名取, 1972: p. 183]。

6. 計測値よりみたキテの諸型式

キテの測定値は、表1に列記したとおりである。一部が欠損しているキテは、推定値を()内に示しておいた。また、測定した部位は、a~fの6カ所であり、図11に拠っておこなった。この図11について、若干補足しておきたい。そのひとつは、測定部位bとcをどのようにして求めたかである。まず、索孔の2つの孔の中心を結ぶ直線をひき、その中点をpとする。つぎに、銚の中心軸に対して、点pから垂線をおろし、その交点p'とする。この点p'をもって、図11にみるように、銚の前半部bと後半部cに区分した。索孔が単孔のばあいは、その中心を直接p'とする。双索孔は、横位、斜位、縦位と、およそ3種の位置関係をとるが、この2つの孔の中点が、銚のバランスをとるうえで、最も重要である。銚の観察所見によると、9のように、重心を中央寄りに移すため索孔をあけなおした例さえある。また、銚の大きさを変えたり、体部の内をそぎ落して重心の位置をつねに調整したものとみられる。筆者が試みた重心の位置を知る方法は、索紐を手にもって銚を垂り下げるもので、約50例ほどしか実施しなかった。これで見ると一般に銚は銚の方が重く、尾部はやや軽い。このとき索紐と銚のなす角度は、銚部115~145°、尾部35~65°の範囲に集中する。

図12は、type ごとにみた銚の最大長と最大幅を示したものである。これによって、つぎのことが明らかであろう。Type A は、長さ幅ともずぬけているグループで、他

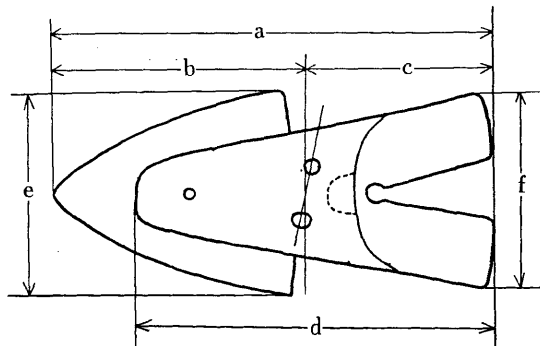


図11 キテの計測部位

10) この Type E 系列の銚は、続縄文時代から19世紀まで存続していた可能性も考慮に入れるべきである。

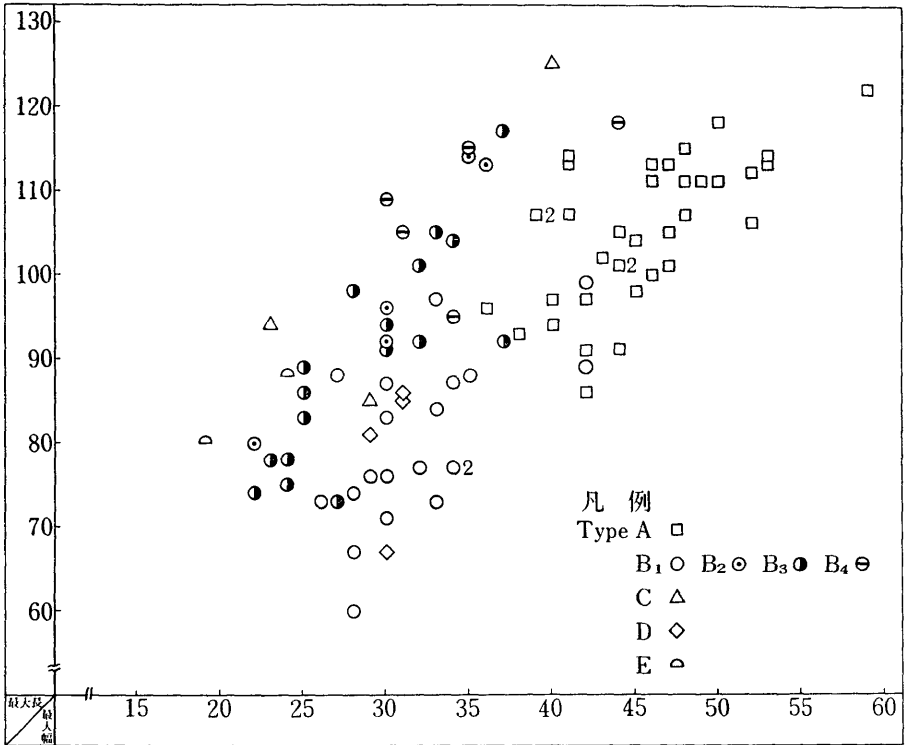


図12 鉗の最大長と最大幅（単位 mm）

の鉗とはほとんど混在せず，独立した範囲内におさまっている。この分布からみて，Type A は型的にきわめて安定したものであるといえよう。最大長は100～110mm 前後に中心をもち，最大幅は40～50mm 付近に集中している。Type A と近縁関係にあると考えられる Type B₂ は資料が少ない。しかし，ひとつの傾向はでているようにおもわれる。Type A に較べると最大長はいくぶん小さいが近似しているとみてよいであろう。しかし最大幅の集中は30mm 付近にあるようにおもえる。長さも幅もかなり差をもち，シリカップを捕るための大形グループと，これ以外のグループに2分される可能性が大きい。いづれにしても，形態的にはひとつのグループとして捉えられるが，大きさにかなりバリエーションをもっているらしい。

Type B₁ は，Type A の分布する範囲にわずかしかりこまず，別の分布を示している。長さ幅とも変化に富む数グループで構成され，型的には斉一性を欠いている。そのひとつのグループは長さとの比が似ており，ほぼ同一ライン上に並ぶようである。おしなべて，幅は30mm 付近に集中しているが，長さ70～90mm は前後であ

る。長さが60 mm という、銛のなかで最短のものも含まれている。Type B₃ はかなり大きな分布範囲を示す。最大幅は24 mm 前後のグループと32 mm 前後のグループが存在しているとみられる。長さはおよそ75~115 mm ぐらいまで、集中しないで散在しており、長さに顕著な差がある。しかし、Type B₃ は、形態的にはあまり変化がなく安定度の高いものであり、長さとの変差は、用途のちがいを反映しているようにおもわれる。Type B₄ は、資料が少ないが強いて述べるならば、最大幅は30~35 mm 前後に集中するとおもわれる。長さはいつも大きく、Type A にほぼ同じく100~110 mm 前後に中心があるらしい。Type C は資料が数例しかないが、長さ幅ともに大きなバリエーションをもつものであり、総じて大形の傾向を示す。Type D は、おしなべて小形であり、幅は30 mm、長さ85 mm は付近に集中し、強い斉一性をもっているといえよう。Type E は形態上これまでの銛と全く系列を異にするので、他との比較はダイレクトに扱えないであろう。長さは80~90 mm 付近に集中するものであろうか。これらの銛のなかで、最大幅が30~35 mm、最大長が90~110 mm 付近にはいくつかの type が混在している。これは、type を異にするが捕獲対象の獣魚を同じくすることに起因するものかも知れない。これについては今後究めてゆきたい。

また、図13は、最大長と尾部幅の比を算出して描いたものである。ことに、比較的

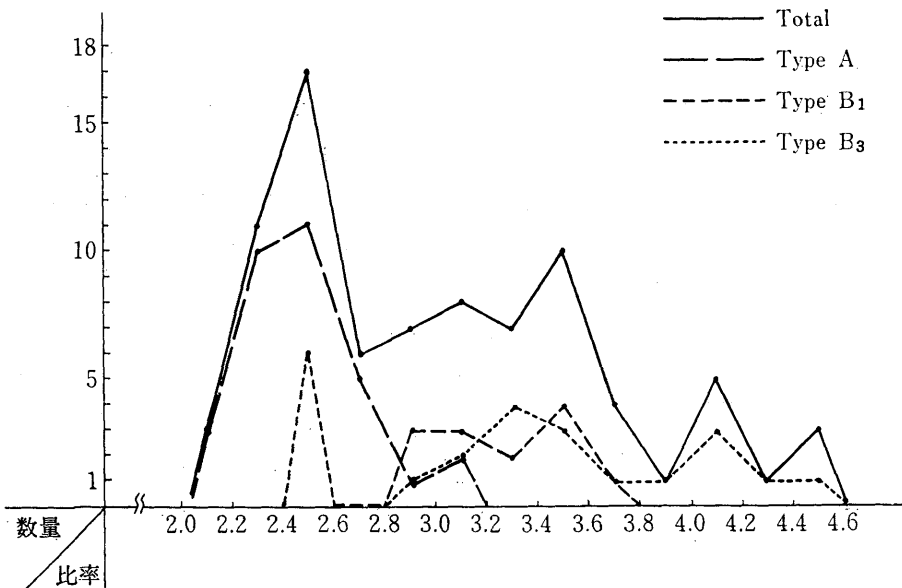


図13 最大長と尾部幅の比

資料の多い Type A, B₁, B₃ の3つについてみてみたい。全体的にみると1:2.4~2.6 および1:3.0~3.6のあたりにひとつのピークがある。これを Type A でみると前者の1:2.4~2.6のピークをほぼ独占しており、これを中心に正規分布を描いている。また後者のピークである1:3.0~3.6のあたりは Type B₁ と B₃ が占めている。しかし、Type B₁, B₃ とも大きなピークを形成しない。

Ⅳ．諸系列の編年的位置づけ

筆者によって、8型式に細分されたキテは、どのような編年的序列関係にあるのか、ここで論じてみたい。この編年的位置づけには、考古学的発掘によって出土した鉞を用いた（図14）。また、アイヌに関する20世紀以前の記録と、生活風俗を描写した、いわゆるアイヌ絵類を用いた。

本論文のはじめに述べたように、これまでのキテの研究は、1939年に名取武光によってはじめて体系化への試みがなされ、大きく3つの地方相と6つの小区分が設定された。それは、第3回東京人類学会・日本民族学会連合大会での発表レジュメであるため、きわめて短文で簡略な記述であった。その概略をまとめるとつぎのようになる。

キテは、北海道の「西南部から本州に続き、単翼（かえしが一つのもの）で紐孔を欠くか或は先金（鎌）と平行の紐孔のある型式を含む地方がA区」。「双翼で先金と直角に一对の紐孔のある型式を含む地方、即ち北海道本島と千島がB区」。また、鉄製鉤引式鉞や二重離脱と滑走板付柄など「多くの特徴をもってC区」に大別される。さらに、B区は翼に表裏のあるなしで、西南部亜区と北部亜区に分けた。前者はさらにフンベキテ、キナボキテの内浦湾小区とシリカップキテ、キナボキテ、ヌサパロキテの白老小区（室蘭～浦河）をつくっている。後者は、西北部小区（余市、忍路）の鉞体の稜線があるものと東北部小区（北見、釧路、十勝、千島）にみられる、体は細長で斜交紐孔のものに分れるとした。しかし、図版がまったく示されておらず、具体的内容を検討する手がかりが得られなかった。1972年によく図版が公表され、補註がくわえられたことによって、この先駆的労作の全体像が明らかにされたのである。

筆者の設定した型式内容とその分布を名取論文と比較すると、A区は Type E に相当するであろう。西南部亜区における内浦湾小区のフンベキテとは、Type D に相当する。しかし、白老小区のシリカップキテのあり方は、筆者が述べたように Type A, B₂ と細分され、分布も修正しなければならない。また、北部亜区の西北部小区は、Type C に相当するが、分布は拡がるものである。そしてこの亜区の東北部小区は Type B₃ と B₄ に明確に細分できるのである。名取の3大別6小区分は、あくまでも

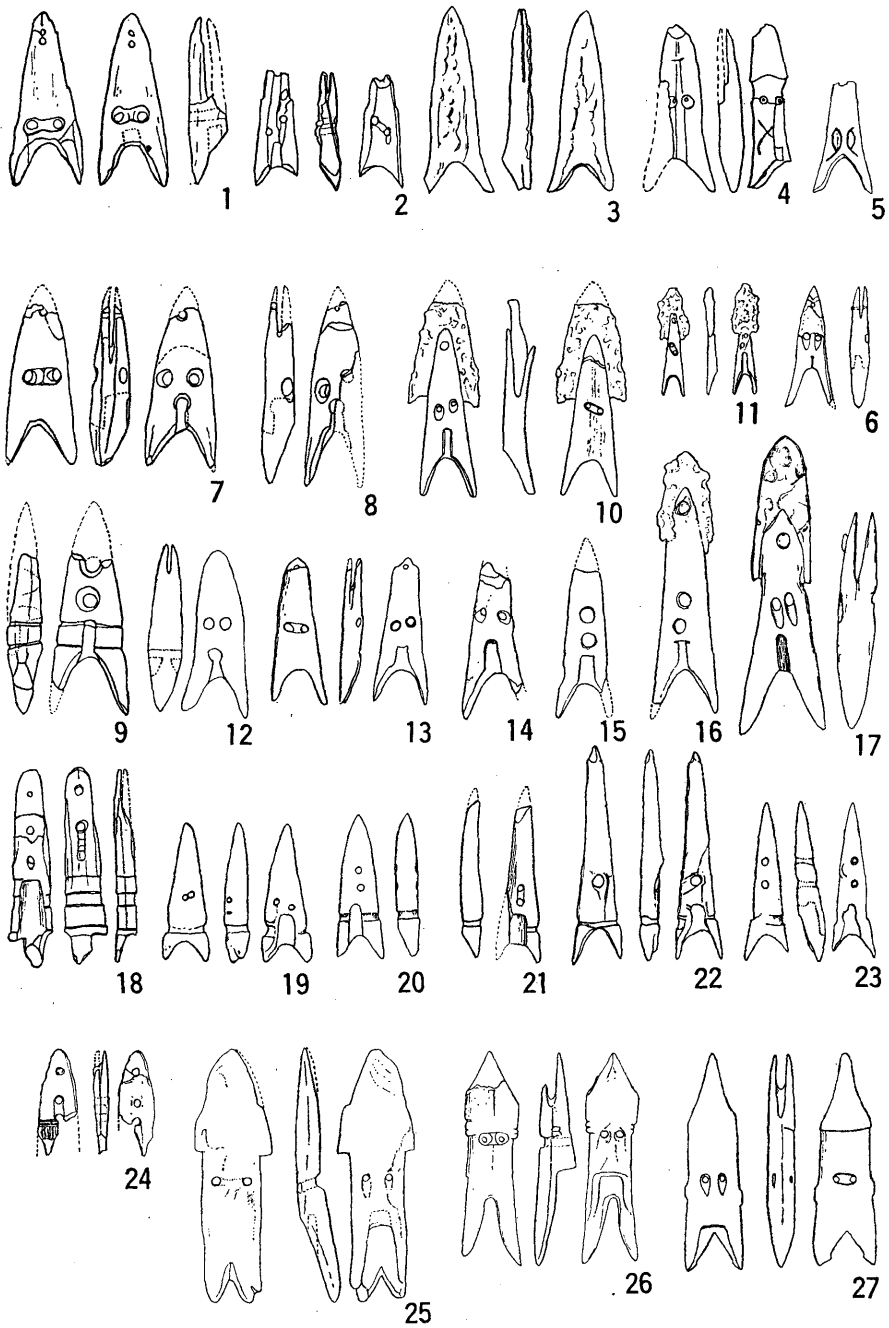


図14 19世紀以前の鉾の系譜（縮尺 1/3, 6は計測値不明。また 15, 16は【知床遺跡調査班, 1967】写真11よりトレース）

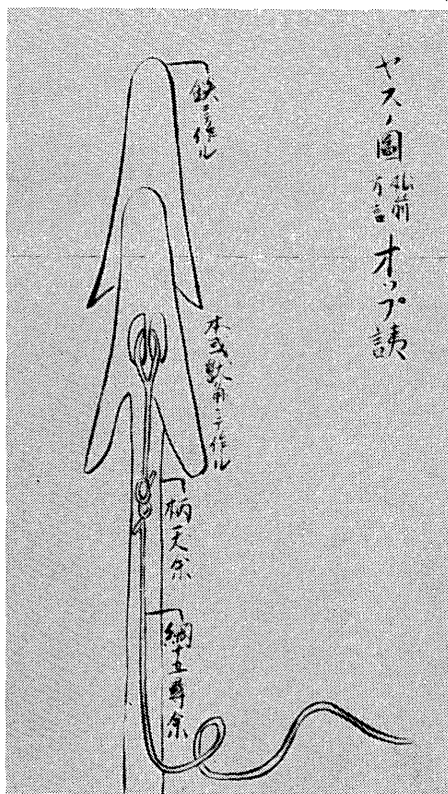


図15 1801年(享和元年)にクナシリ、エトロフ島方面で描写された鉞【福居, 1801】の写本による。

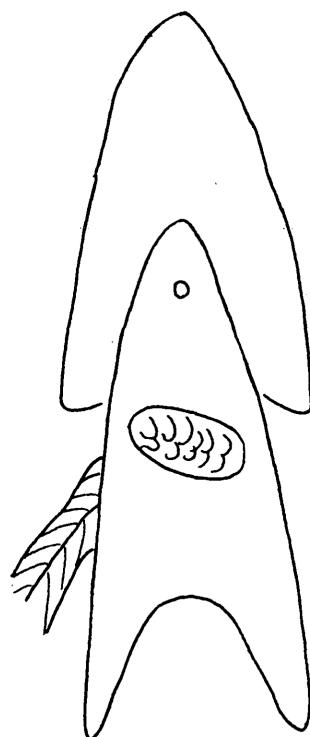


図16 1725年(享保9年)土佐沖で捕獲の鯨より見つかった鉞【名取, 1972】による。

地方相といった<ヨコ>のレベルにウエイトがおかれていたため、編年・系統という<タテ>の問題を追求するためには、あらたに型式設定を必要とした。しかし、これは名取によって切り拓かれた道があったからこそ可能であったことはいうまでもない。

キテの出自、系統に関する究明は、今日まであまりなされてこなかったといっても過言ではない。キテの出自については、これまで触れられたものがなかったわけではないが、いずれもわずかに粗述されている程度である。しかもそれは、先史時代からの鉞の編年系列の終焉に位置するものとして、少しばかり扱われているにすぎない。これには、岡田宏明【岡田, 1960: pp. 85-89】、佐藤達夫【佐藤, 1964 別篇: pp. 84-86】、筆者【大塚, 1966: pp. 33-46】、前田潮【前田, 1972: p. 168 および 1974: pp. 1-35】、千代肇【渡辺, 1973: pp. 201-202】などあげられよう。

筆者はこの論文では、いままでの編年作業とは逆の方向、つまり20世紀からさかのぼってゆくという試みができたことによって、つぎに述べるようないくつかの収穫を

得た。つまり、「かくして、先史時代の銚は近世アイヌのキテに連がるものである」という片づけられかたがもはやできないほど、キテは複雑な内容をもっていることが明らかとなったのである。それでは、8型式に区分できたキテが、それぞれどのような時間的に異なる系統関係をもつものであろうか。

まず、図14の資料について概略を述べておきたい。1は門別町シノタイ貝塚〔扇谷、1967: p. 58 第19図〕、2は余市町天内山遺跡〔峰山・竹田、1971: pp. 62-63〕3・4は小樽市桃内貝塚〔名取・松下、1964: p. 127 第4図〕、5は厚岸町オカレンボウシ貝塚〔清野、1969: p. 470 第423図〕出土であり、いずれも1880年よりいくらか年代的にさかのぼる可能性がある。また、いずれも茎槽に切り込みがない点が年代決定のひとつの有力な決め手になるであろう。

ついで図14-6は厚岸町筑紫恋貝塚出土で、報告者は1700年頃のものとして推定している〔岡田他、1961: p. 130 第2図〕。7～9は、青森県下北郡東通村尻屋の大平貝塚出土で、他に樺太犬またはアイヌ犬の類とおもわれる遺存骨が発見されている〔橋、1976: p. 20 第1図〕。調査者は鎌倉～室町時代に比定している。すなわち1185～1573年の間に位置するものと見做しているわけである。10・11は室蘭市増市遺跡〔大場、1962: p. 45 第25図〕、12は厚岸町オカレンボウシ貝塚〔清野、1969: p. 468 第420図〕13は網走市モヨロ貝塚〔大場、1955: p. 181 第6図〕、14は常呂町トコロチャシ1号竪穴表層〔駒井編、1964: p. 44, Fig. 39〕、15・16は羅臼町飛仁帯洞穴〔知床遺跡調査班、1967: p. 77 写真11〕、17の雅内市オンコロマナイ貝塚〔大場・大井編、1973: p. 32 第15図〕出土である。これらはいずれも、茎槽にある程度溝幅の狭まった切り込みをもっている点が共通している。

さらに図14-18は奥尻島青苗貝塚〔渡辺、1973: p. 200 第91図〕、19・21・22はモヨロ貝塚〔大場、1955: p. 181 第6図〕、20もモヨロ貝塚〔米村、1950: pl. 47〕、23はトコロチャシ1号竪穴表層〔駒井編、1964: p. 44 Fig. 39〕出土である。この図14の18～23は、茎槽が大きく切り開かれたもので、茎溝式¹¹⁾に近い。図14-18は茎溝式そのものである。また、これらはいずれも中柄を結縛する溝が体部をめぐる。この中柄結縛溝をもつものは、もたないものより相対的に古いものである可能性がある。

そして図14-24は別海町別海遺跡〔北構・岩崎編、1972: p. 91 Fig. 33〕同25は根室市弁天島遺跡〔前田、1974: p. 7, Fig. 3〕、26も根室市弁天島遺跡〔根室市教育委員会、1966: p. 46 第22図〕、27は樺太・好仁村藻白遺跡〔木村信六編、1934〕出土のものである。図14-24は、いわゆるオホーツク・擦文融合型式の段階に位置づけられ

11) 中柄が茎槽に挿し込まれるのではなく、溝にはめこまれて両者は紐で結縛されるもの。

る可能性が大きいとしている [北構・岩崎, 1972: p. 168]。

図14の25～27の鉞は、オホーツク文化の貼付浮文期相当のものとおもわれる。

図14に示した鉞のうち、1～5はほぼ同一の時期で、およそ18～19世紀に編年されるものとする。また6～23は、14～17世紀に位置づけられよう。24は14世紀もしくはそれ以前であろう。25～27は、24より古く考えてよいであろう。ここでは、1～5の鉞は、キテの出土した資料とみておきたい。なぜならばアイヌのキテは、1879年に収集された56にみるように、筆者が扱った資料のなかにも、何世代か継承されて伝世されてきたものもあるに相違ない。このようにみると、単に出土したからといって伝世のものより古いとは限らないであろう。しかし、6～17のごとく、茎槽にかなり幅広の切込みのあるものは、伝世資料になく、ひとつの型式的斉一性をもつので、これらを仮に Type F と呼んでおきたい。19～23も Type F に含めておくが、前者のグループよりいくらか古い様相をもっているとみたい。18は擦文文化の伝統をひくもので、時期的には19～23と同一とみておきたい。こうしてみると、図14の25～26の type から同24が生まれた可能性が強い。この24は索孔が縦位であり、それは20, 21, 23あるいは15, 16といった縦位索孔の鉞と深い関わりをもつものであろう。この縦位索孔の近似したものは室蘭市エンルムチャン跡より出土している。また図14-9にみるように遠く青森県の大平貝塚からも1例出土している。この Type F に含まれる資料としては、この他に神恵内村観音洞穴の索孔の位置がやや斜位のものが知られる。しかし、茎槽の切り込み溝や体形は図14-16にはほぼ等しい [森, 1976: p. 50 図7]。

以上の編年の枠組みをもとにアイヌの8型式のキテの諸系列を検討する。

はじめに、Type A は考古学的な発掘ではまったく得られていないこと。この Type A に近縁関係にあるとみられる Type B₂ に属する52は、19世紀以前の貝塚から採集されている。これからみて、59のごとき Type B₂ のなかでも大形の鉞が、36のように変形し、ついに Type A の誕生を胆振沿岸でみたという可能性は大きい。ちなみに、松浦武四郎の『東蝦夷日誌四篇』シャクシャインによる寛文9年の抵抗運動の顛末に関する記事のなかに「錫者允首長此處に城壘取立、尻利角と云魚の鱗にて柵を結ける。此骨は火にも焼けず、4年を経るとも朽ること無物也。」と [松浦, 1867]。この尻利角は、まさしくシリカップである。しかし鱗ではなく、口吻部であろう。捕獲すると海上で直ちに解体し、切り落した長い吻のついた頭を舟の後部に立てる。そこで、その舟が何頭のシリカップを漁ったか分るといふ [名取, 1972: pp. 193-194]。この武四郎の記述は寛文9年(1670年)の事情というより、シャクシャインの掬ったシベチャリのチャシ *chasi* (砦・柵の意) にたてならべて柵にするほどたくさんシリカ

ップ漁をしたということであろう。武四郎が静内を訪れたのは安政5年(1858年)であるので、これ以前から日高ではシリカップ漁が盛んであったとみてよい。おそらく、メカジキ漁が胆振沿岸において盛んになるのはこの直後あたりであろうか。なぜ胆振で盛んになるのか分らないが、メカジキの回遊状況が変化し、胆振沿岸近くに寄るようになったのかも知れない。これに対し日高では沿岸近くを通らなくなり、メカジキ漁は振わなくなったとみられる。

Type C にきわめて近似したもの(図14-3・4)が小樽・桃内貝塚より出土している。余市・天内山遺跡から出土した銚(図14-2)も Type C に含められるものであろう。この Type C は、100年以上も前から少くとも石狩湾西部に存在していたとみてよい。

また Type B₄ に類似のものには図14-5の銚、Type B₃ に属すとみられる銚は図14-6があげられる。体形や茎槽の切込みが76に近似している。図14-8は、網走・モヨロ貝塚出土である。体形は Type B₁ に近いが切り込みがある点から Type B₃ に含めたい。稚内・オンコロマナイ出土の銚(図14-9)は、茎槽の切り込みがあることや体形からみて Type B₃ に近い。

享和元年(1801年)に福井芳麿の著わした『蝦夷之島踏』に図示されているキテが図15である[福居, 1801]。これは茎槽の切り込みの有無は確認できないが Type B₃ のものであろう。さらに斜里・クシュンコタン貝塚出土の銚は図14-4に近いものであろう。1411年より鑄造され始めた永楽通宝が伴出しているらしいが詳しいことは分らない[河村, 1966: pp. 66-67]。

図16の銚は、享保9年(1725年)12月に土佐沖にて捕獲された鯨より発見されたものである。これは1938年に喜田貞吉が高知城内懐徳館に陳列してあったものをスケッチして名取武光宛に書き送った図である[名取, 1972: pp. 198-199]。銚の表面の図であるため、裏面ならば観察できる茎槽の切り込み溝の有無が分らないのはおしまれる。最近、現物の所在を問い合わせたところ行方不明とのこと。この銚は下北半島の尻屋・大平貝塚から出土している銚(図14-7)と体形が似ている。

このように、アイヌのキテは、その諸系列のうち、Type F にさかのぼるものも確実に含まれていることが明らかにされた。今後は、より一層 Type F の型式細分化をはかってゆかねばならない。

V. ま と め

これまで述べてきたことは、集約するとおおよそつぎのようになる。

a. アイヌの鉞は、8型式に型式設定される。この型式のちがいは、それぞれの地域に回遊してくる獣魚のあり方に対応することはいうまでもないが、ひとり生態的な条件のみでなく、技術的伝統や、さらにまた集団や家系などさまざまな背景を表わしていることが明らかである。

b. 8型式のキテは、20世紀初頭の時点で成立していたものであって、これらの各型式の系列は系統的にも異なるばかりでなく、出現の時期も異にしていることが明らかにされた。すなわち、アイヌのキテのA-Eまでの各型式より以前に、Type Fが存在し、この中にすでに系統的な違いが認められることを指摘できた。また、このType Fは、オホーツク文化からの影響を強く受けついでいることが確実である。

c. オホーツク文化においては、図17にみるように積極的にクジラ類の捕獲を行っていることがわかる。このような技術的伝統が、オホーツク文化が変容してしまった14~15世紀以降においても、アイヌの祖先たちに受けつがれたとみてよいであろう。寄りクジラのみ依存していたのではない。さらに、1725年にキテを射込まれた土佐沖のクジラの例は、稀なものではないであろう。したがってType Dの鉞のみがクジラ漁につかわれたのではなく、内浦湾にかぎらずもっと広く道内の沿岸で捕獲されていたものであろう。クジラは、肉を乾燥して貝鯨や石焼鯨として交易品にもされたことが諸書にみえる。

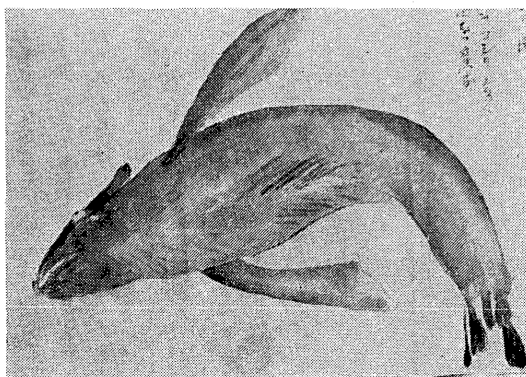
d. 毛皮獣の需要が17世紀より急速に高まり、松前藩はオットセイやラッコの皮をアイヌより独占的に収奪するため、特惠的なレートで会所に差出させて遇したとされている。こうした海獣皮の生産とType Fの鉞の発展は、とうぜん関係があるものであろう。

また、アイヌにおけるキテ漁の終焉は、19世紀後半であるが、その大きな要因としては、資源の激減であろう。アメリカやロシアの捕鯨船やラッコやオットセイなどの毛皮獣を専門に猟獲する船が千島列島や北海道近海において行なった、銃器などを利用した近代猟法による乱獲は、キテ鉞でたちむかうアイヌに大きな影響を与えたものとおもわれる。その頃、おそらく自家消費とおもわれるメカジキ漁が胆振で盛んにな

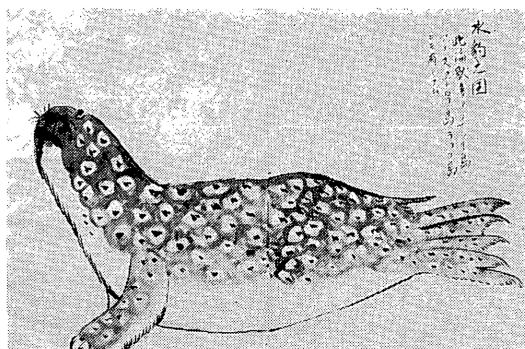


図17 鉞を射込まれたクジラ類
(オホーツク文化期、骨針入れに線刻) 現物は、北構保男氏蔵

るのはまことに興味深い。また、19世紀末の明治政府による拓殖政策によって、アイヌ社会が変容をよぎなくされ、出稼ぎ労働がふえる情況のなかで、伝統的な狩猟、漁撈による生産形態は、維持しえなくなることも終焉を早めたことであろう。



1 オットセイの図



2 アザラシの図



3 ラッコの図

図18 オットセイ・アザラシ・ラッコの図

1・3は『蝦夷島奇観』写本より、2は『蝦夷之島踏』写本より。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、北海道大学農学部付属博物館の資料について、1967年夏に実測および写真撮影を許された犬飼哲夫北海道大学名誉教授、阿部永北海道大学助教授、同じく東北大学の資料について許された伊東信雄東北大学名誉教授、ならびに芹沢長介東北大学教授に深く謝意を申し上げたい。また、金盛典夫北海道斜里町しれとこ資料館学芸員と其田良雄市立旭川郷土博物館学芸員には、わざわざ鉞の実測図を作成していただいたばかりでなく、文献等のご恵与もいただいた。

さらに名取武光前北海道大学助教授には、ご自身が1937年に収集された資料の本論文への掲載を心よく許されたばかりでなく、貴重なご助言をたまわった。

また、海獣・魚の生態に関する文献については、岩井保京都大学教授にご教示いただいた。前田潮筑波大学助手には、日頃から討論をつうじて啓発された点が少なくない。

グラフの作成に関して、中村俊亀智本館教授にご指導いただいた。

文 献

- Batchelor, J. 1925, 『アイヌ人と其説話』 富貴堂書房。
知里真志保, 1962, 『分類アイヌ語辞典』第2巻, 日本常民文化研究所。
遠藤源七・毛利総三郎, 1940, 『沼津貝塚骨角器図録』。
藤本英夫, 1966, 「先史時代」『新冠町史』新冠町役場。
藤村久和・平川善祥, 1975, 「第3部 K.H翁」『民族調査報告書』資料編Ⅲ, 北海道開拓記念館。
福井久蔵編, 1937, 『蝦夷島奇観補注』厚生閣。
福居芳麿, 1801, 『蝦夷之島踏』
長谷部言人, 1926a, 「燕形鉞頭」『人類学雑誌』第41巻, 東京人類学会。
———, 1926b, 「燕形鉞頭とキテ」『人類学雑誌』第41巻, 東京人類学会。
北大解剖教室調査団編, 1963, 「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』第18輯, 北海道大学。
金盛典夫, 1970, 「所謂キテの新資料2例とその機能的差異」『釧路市立郷土博物館報』No. 202, 釧路市立郷土博物館。
河村淳史, 1966, 「斜里町クシュンコタン貝塚発見の廻転式燕形鉞頭」『北海道考古学』第2輯, 北海道考古学会。
木村信六編, 1934, 『本斗郡先史時代遺物発見地名表』木村郷土研究所。
北構保男・岩崎卓也編, 1972, 『浜別海遺跡1971』北地文化研究会。
北構保男・須見 洋, 1953, 「北海道根室半島, トーサムボロ, オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』第24輯, 国学院大学考古学会。
清野謙次, 1969, 『日本貝塚の研究』岩波書店。
駒井和愛編, 1964, 『オホーツク沿岸・知床半島の遺跡』下巻, 東京大学文学部。
河野広道, 1963, 「先史時代」『静内町史』静内町役場。
久保寺逸彦, 1977, 『アイヌ叙事詩, 神謡・聖伝の研究』岩波書店, 印刷中。
前田潮, 1972, 「骨鉞について」『浜別海遺跡』北地文化研究会。
———, 1974, 「オホーツク文化とそれ以降の回転式鉞頭の型式とその変遷」『史学研究』第96号, 東京教育大学文学部。
松浦武四郎, 1867, 『東蝦夷日誌』。
峰山巖・竹田輝雄他, 1971, 「骨角器」『天内山——縄縄文・擦文・アイヌ文化の遺跡——』余市町教育委員会。
森 浩一, 1976, 『考古学入門』保育社。
中込 淳, 1958, 「太平洋北西部に於けるメカジキの漁況と体長の周年変化及び分布と廻游について」『Bulletin of the Japanese Society of Scientific Fisheries』Vol. 24, No. 5, 日本水

産学会。

名取武光, 1939, 「アイヌの原始狩漁具 <ハナレ> と其の地方相」『東京人類学会・日本民族学会連合大会第 3 回紀事』東京人類学会・日本民族学会。

———, 1940, 「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究報告』第 3 輯, 北海道大学。

———, 1972, 「アイヌの原始狩漁具 <ハナレ> と其の地方相 (補遺)」『アイヌと考古学(-)』北海道出版企画センター。

名取武光・松下 亘, 1964, 「桃内遺跡」『北方文化研究報告』第 19 輯, 北海道大学。

名取武光編, 1970, 『フゴッペ洞窟』ニュー・サイエンス社。

農商務省水産局, 1912, 『日本水産捕採誌』下巻, 水産書院。

大場利夫, 1955, 「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』第 10 輯, 北海道大学。

———, 1962, 「増市遺跡」『室蘭遺跡』室蘭市他。

大場利夫・大井晴男編, 1973, 『オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会。

扇谷昌康, 1960, 「シノタイ岬—沙流川河口におけるアイヌの遺跡」『北海道地方史研究』35, 北海道地方史研究会。

———, 1967, 「アイヌ時代」『日高の文化財』第 1 集, 日高管内郷土史研究協議会他。

大塚和義, 1966, 「抉入離頭銜」『物質文化』7, 物質文化研究会。

———, 1975, 「アイヌの諸系統——墓標による抽出——」『埼玉県立博物館紀要』1, 埼玉県立博物館。

岡田宏明, 1960, 「アイヌ文化史に関する一考察」『民族学研究』第 24 卷第 4 号, 日本民族学会。

———, 1973, 「1959 年度の調査」『オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会。

岡田宏明他, 1961, 「厚岸町筑紫恋のチャシと貝塚」『釧路市立郷土博物館報』No. 117, 釧路市立郷土博物館。

桜井清彦, 1958, 「北海道奥尻島青苗貝塚について」『古代』27号, 早稲田大学考古学会。

佐藤達夫, 1964, 「網走モヨロ貝塚」『オホーツク沿岸・知床半島の遺跡』下巻(別篇), 東京大学文学部。

佐藤三次郎, 1938, 『北海道幌別漁村生活誌』アチックミュージアム。

知床遺跡調査班, 1967, 「知床半島の遺跡」『知床半島』北海道教育委員会。

橘 善光, 1967, 「下北半島尻屋大平貝塚」『考古学ジャーナル』12, ニュー・サイエンス社。

坪田嘉子・石附喜三男, 1959, 「北海道神恵内洞窟出土の土器」『先史学研究』1, 同志社大学先史学会。

苫小牧市青少年センター編, 1975, 『アイヌ民族資料展』苫小牧市青少年センター。

渡辺 誠, 1973, 『縄文時代の漁業』雄山閣。

八幡一郎編, 1966, 『北海道根室の先史遺跡』根室市教育委員会。

米村喜男衛, 1950, 『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館。